

# 『雨月物語』

—その闇と光— I

青 木 正 次

羅子撰水滸。而三世生啞兒。紫媛著源語。而一旦墮惡趣者。蓋為業所偏耳。然而觀其文。各々奮奇態。嗚呼遁真。低昂宛轉。令讀者心氣洞越也。可見鑑事實于千古焉。

簡潔に小気味よく振り切った文体で古典の内部へと己れを沈めようとつとめようとするとき、そこにねばりついて離れぬ生臭く含むところあるかの如き視線が、千古に鑑せらる事実の躍動へ真直に参入することから絶えず彼をずり落とす。この視線は例えば次のような形で彼の生活の中を渦巻き貫いていたものである。

ふくの神も貧乏神も、いろ／＼の所へまで廻らしやます事じゃ。千陰といふ下手よみは、当時日本一の大家じゃ。手もよいやうでようなし。歌は下手也。文盲なり。だいこくさまがお入なされねば。あんな名利の人にやなられぬものじゃ。

胆大小心録一一一

こうした眼つきは外にくらでも見出せる。「三井は浪人者、白木やはきせる屋、かうの池は小酒や、小橋やは古手や、辰己やは炭や也。神代からつゞいてある家のやうにはこる事おかしし」(同二一〇)や「その儒者どもがその心ゆへ、身持がわるうて、徂來学じゃといへば、今の俳かいしのやうな相場じゃあつたげな。太宰といふが力まれても、とかくに本家の評判がわるいから、とんと跡がない。」(同二二〇)などの近くから、「『つきげばきたないことじゃ梅だらけ』。ひつつかんだ口には、芭蕉などといふこしらへ者が、よりつけることじゃなかつた。」「宋

の詩はきれさい工のおやま人形、明の詩はつくりつけのこのぼうで、はたらきがないげな。又清の詩人はこれをようかき交せて、又一風じゃが、これも小刀がきつ過ぎて、唐詩に遠き事千里の東西のたがひじゃげな」に至るまで、卑近な口語を通すとき、殆どこの視線は庶民の刺を含んだ悪口話の生活的次元から立ちのぼってくるものであることが明らかに。分限者だろうが、学者だろうが、芭蕉から本家の詩文に至るまで、煙管屋や古着屋の身持や相場、あるいは彼らのひつつかみ方やたらきや刀のきかせ方など、下層町民の生活感覚から睨まれてしまっているのである。不可解な世界という感覚は、この下層町民の生活から見られた上層町人への怨み怒りを含んだ眼つきからやってくるものである。

羅子は水滸を撰して三世啞兒を生み、紫媛は源語を著わして一旦悪趣に墮するは「蓋し業を為すことの信る所のみ」というきつぱりした断定は、すべての行為に依じて、不可解な負債を背負い込まされずにはいない彼らの生活感覚からする常態の表現の根にしているとみねばならない。羅子や紫媛といえどもこの険のある眼で見られることよって、その低昂宛転する生気が得体のしれぬ負債から立ちのぼったものとして心気を洞越させ、また事実を千古に鑑するものとして確かめられているのである。

とすれば、筆者にはすでに生活民のいわれなき負債のしるしが明瞭にあることを、彼は唯一の根拠として「剪枝畸人書す」と記す。

余適有跛腹之閑話。衝口吐出。雉雛竜戦。自以為杜撰。則摘說之著。固当不謂信也。豈可求醜唇平鼻之報哉。

跛腹之閑話が「今世名利の人は、太平の煩はず也。芸技諸道さかんにして涌くが如し。是亦治国の塵芥也。」（胆大小心録一六）というところの治国の塵芥、さかんなる芸技諸道の水準で表出せられ、雉雛き竜戦う杜撰な姿を強いられている様であり、たとえそれが口を衝きて吐き出されるほど肉体の（觀念でなく）奥から噴き上げてきた

ものであっても、雄雌き竜戦う奇態をねじゆがめられた鬱屈の姿と有閑な文体においてしか表現の形を見出せぬ苦悶の叫びがある。自ら以て杜撰と為すとは出口を見出せぬ生活民の触覚からの批判の有閑的表現なのだ。摘読者がその一瞥で固よりまさに信と謂はずという確信は自己の表現が射当てるべき的を正確に見すえながら届かぬもどかしい苦がさと射落さずには止まぬというひそかな覚悟を含むものである。醜唇平鼻の報はすでに剪枝として刻印されてはいるが、的を射た晩には到底、そのような軽傷では済まぬ。しかし今は未だその軽傷でさえ求めてこれを受けるほどの資格を自らに認めることができぬというのである。もっと己れの奇怪な傷を掘ること、そのすでにある傷にふさわしい表現、文体を探り当てねばならない。それがいわれなき傷を受けて生きる生活民の世界、三世の啞児につきまとわれ、悪趣に墮する者からのみ発する噂喋真に迫り低昂し宛転し読者の心気をして洞越たらしむる千古の事実への直通する路であることを彼は確信している、

折から雨は「霽れ月は朦朧之夜」である。光と影の渦巻き荒れた時間の名残りはまだ揺曳している。肉体に残された刻印と共に。

あふ坂の関守にゆるされてより、焔こし山の黄葉見過しがたく、

何者かに突然ク許されるクことからそれは始まった。これは焔こし山の黄葉見過しがたき心を植えつけられて追放されるところから、未だ社会的立場、つまり名をも、またそこに生きる自我、われなる意識も生れぬうちから、人生きるV時間が始まったといっても同じことだろう。秋こし山の黄葉が逢坂の関守に許されてより見過しがたくなったと読めば、それは明らかに自分の生存の仕方についての罪と罰について、いつていることになる。

逢坂の関の向うは異境の筈である。だが「浜千鳥の跡ふみつくる鳴海がた、不尽の高嶺の煙、浮嶋がはら、清見が関、大磯小磯の浦く。むらさき艶ふ武蔵野の原塩笹の和たる朝げしき……」とあれば、それらの言葉の連鎖に

こちらをばね返し覚醒させる異物としての自然は窺えず、逆に想念をまといつかせる依り代、こちらを吸収しとかし込む混濁し漂う全体の核としての自然しか現われていない。つまり、歌枕は呪詞であり、象潟の蟹が笹や、佐野の舟梁木曾の棧橋とたどれば明らかのように、それは衆庶のみすぼらしい生活の転倒された美化や幽冥なる境としての自然の洗練にすぎない。だが逢坂の関の向うへの旅が、こうした土俗の洗練にとゞまるのだから、そうしたイデオロギー的転倒に「心のとゞまらぬかたぞなきに、猶西の国の歌枕見まほしとて、」旅を続ければ、「須磨明石の浦ふく風を身にしめつも」と早くも孤立と覚醒の風が身にしみはじめ。それにつれて、次々に現われては消えるだけの歌枕から離れて、「草枕はるけき旅路の勞にもあらで」、つかれた訳じゃないとわざわざ断りながら「観念修行の便」に杖をとゞめる。

秋こし山の黄葉見過しがたくという、凋落するものへの傾斜かと思えた旅は彼を弱らせもせず、土俗の言語的洗練から観念的論理化にまで彼をつれ出した。逢坂の関守は彼をこのような道程へと送り出したただけなのか。とすればそれは世俗的出世、成り上がりにすぎないが。

この里ちかき白峰といふ所にこそ、新院の陵ありと聞きて、拜みたてまつらばやと、十月はじめつかたかの山に登る。

急に現われた山影、これが冒頭の秋こし山だったのか、観念修行の脇に対峙するように屹立するこのものに黄葉しているに違いない十月初めのぼり始める。もはや歌枕のうちに閉じこめられぬ相貌「松柏は奥ふかく茂りあひ」険悪な猥雑さを示し、日常的な二元性は崩れかゝり「青雲の輕靡日すら小雨そほふるがごとし」。観念修行の身を脅かすように「児が嶽という峻しき嶽背に聳だちて、千仞の谷底より雲霧おひのぼれば」、この幾何学的抽象性にまで至る地形にかこまれ、また変幻する無形の量に包まれて、観念修行の便も「咫尺をも憐愍こゝ地」の中に失われつゝある。

だが次の瞬間、「木立わづかに問たる所に」彼は了解可能な手懸りを見つけたと思う。「これならん御墓にやと心もかきくらまされて」いる彼は、まのあたりをもおぼつかなき心地を彼にとって納得のいく解釈ですりかえたのだが、暗さはその墓の「うらがなしさ」からやってくるのではないのだ。そうやっても「さらに夢現をもわきがたし」、一層暗さは益々強まるばかり。彼がひろげた考えによれば彼を包む暗さは「万乗の君にてわたらせ給ふさへ、宿世の業といふものゝおそろしくもそひたてまつりて、罪をのがれさせ給はざりしよと、世のはかなきに思ひつゞけて涙わき出づるがごとし」という、無差別にわけもなく襲う非合理的な力と人の無力さの力の差の觀念から流れます。彼は眼前に宿世の業、世のはかなさの觀念を發見している。その上「終夜供養したてまつらばやと」この暗い夜を通してその觀念の前にひざまづこうともいうのである。

松山の浪のけしきはかはらじをかたなく君はなりまさりけり

経文と共に歌を供養したが、歌にこめたイデオロギーはそれにふさわしいものであったが、それが歌であることによってはからずも宿世の業に向つてではなく、それに呑みこまれたものの方に共鳴を示してしまふ。不変の景色、それは歌枕の言葉の指し示す觀念であるが、その不動の觀念の前に今も「かたなく……なりまさり」つゝあるものとして、その滅びの運動をもつてむなししい抵抗を試みるものへ共感を示している。彼のこうしたきざしに合せて、あたりに動き始めるものもある。

日は没しほどに、山深き夜のさま常ならね、石の牀木葉の衾いと寒く、神骨冷て、物とはなしに凄しきこゝちせらる。月は出でしかど、茂きが林は影をもらさねば、あやなき闇にうらぶれて、眠るともなきに、まさしく円位くよぶ声す。

いつのまにか、暗さは夜のそれに接続している一方、月もまた知らぬまに出でいた。雨の気配はもうない。月はあやなき闇にうらぶれる彼を浮かび上らせる。闇に安らぎ眠るが如き彼をめざめさせんとする力が彼に命令する。

それは彼が供養のつもりでした歌に思わずもこめてしまったところの共鳴する心に対してまっすぐに冠せられたものであることを逸することはできない。

それにしても、「貌姑射の山の瓊の林に禁させ給ふ」ものが「詣つかふる人もなき深山の荆の下に神がくれ給ふ」という宿世観の比喩上の場である深山だの、その強調たる天皇の地位だのというイデオロギー的修飾を取りのぞいてみれば、「木立わづかにすぎたる所に、土墩く積たるが上に、石を三かさねに畳みなしたるが、荆蕪薜蘿にうづもれてうらがなしき」「深き夜のさま常ならね、石の牀木葉の貧いと寒く、神清骨冷て……」などの描写が宝曆・天明期の、特に三年の飢饉前後のどんな現実上の光景に見合うかは判然としている。その闇の中から彼は呼ばれ、「眼をひらきてすかし見れば、其形異なる人の、背高く瘦おとろへたるが、顔のかたち着たる衣の色紋も見えで、こなたにむかひて立てるを」ということになれば、△円位▽とは彼以外の名ではなく、向うは真直にこちらの彼に對峙している。彼が自身がまとう観念の闇をすかして見たものは、人ではあるが殆ど彼と同列にはないものゝ姿であったが、途端に彼は「西行もとより道心の法師なれば、恐ろしともなくて、こゝに來たるは誰と答ふ」となる。△円位▽は向うからの命令だが、それに対しこちらは断わりもなくいきなり西行として向う。△西行▽とは異なる人を恐ろしきまゝに受け入れるのではなく、異境にあるものとして対立し近づけぬ者の名である。むろんその眼は宿世の業という明快なイデオロギーのもとに相手を見すえようとする。「こゝに來たるは誰」とは呼びかけへの答へではありえない、それは向うからはこちらが見え、こちらからは定かならぬものへの身構えた詰問である。

この険ある眼つきに△かの人▽はひるむ様子もなく、むしろ懐しさに心許するというのだから、この出合いは無残なものだといえる。かの人は、さきよみつる言葉の中に返歌をもって応えるにたるものを認めている。彼が景色

は変らじと見た入松山の浪V、濁なくなることの反対に位置づけていた基準景が、実は不斷に船を流し送り、撓船へと追いやる動きに他ならぬことを、かの人は告げる。

松山の浪にながれてこし船のやがてむなしくなりにけるかな

松山の浪とはこうした不斷の死と無の圧力のシンボル以外ではないことを返歌とする向うの矛先は痛烈であるが、かの人は「喜しくもまうでつるよ」と迎え容れて、敵意を示すことがない。が、西行の応待はいきなり「さりとていかに迷はせ給ふや」とはねつけ詰問する。「濁世を厭離し給ひつることのうらやましく侍りてこそ」と彼は難ずるが、一体これは何事であるか。歴史における不変なるものというローラーに押しつぶされていく者に向って。かの人はその無念を訴え共有したかったに違いないのだが、また詠歌によってそれらしき様子を見せておきながら、「ひたぶるに隔生即忘して、仏果円満の位に昇らせ給へと、情をつくして諫め」るさまは殆ど冷酷非情といつてよい。だから「新院呵く」と笑はせ給ひ」と笑いが空しく宙に消えるのもまた仕方がない。ついで院は怒りをこめていう

汝しらず、近來の世の乱は朕なす事なり。生てありし日より魔道にこころざしをかたふけて、平治の乱を発さしめ、死て猶朝家に崇をなす。見よくやがて天が下に大乱を生ぜしめん

§ 「雨月物語序」明和五年三月（一七六八）

同書 出版 安永五年四月（一七七六）

§ そこもここも一揆徒党の沙汰にて、日光がすめば山県大弐が出現、大坂が騒げば佐渡ゆるる、伊勢路もめれば越後もやかましく……そろりそろりと天下のゆるる兆も可有御座候（明和五年「鷹山公世紀」）

§ 明和五年一月 大坂 打毀

三月 福井 暴動

四月 越前吉崎

七月 加賀小松 米騒動

〃 後荒瀬村 越訴

〃 筑後祈禱院村 不穩

八月 佐渡 暴動

〃 越後新潟 暴動

九月 越後新潟 暴動

〃 伊勢龜山 強訴

秋 加賀小松 強訴

十月 上野利根郡 越訴

〃 越後十日町 打毀

十一月 越中 不穩

〃 但馬出石 強訴

十二月 越前南条郡 強訴

〃 河内古市 暴動

冬 摂津平野郷 強訴

§ 明和四年閏九月令「國々百姓強訴徒党又は逃散候儀は堅停止」

明和六年一月令「上方筋百姓共強訴いたし相集候趣相聞候間、可成丈取鎮、其上三茂難取鎮様子ニ候ハ、召捕可申候……難

取鎮様子ニ茂候ハ、飛道具等用候而茂不苦候」



§ 明和元年暮、武藏上野下野信濃農民二十万余の反助郷役蜂起、伝馬騷動の記録「狐塚千本館」より

困家の飢渴は兵乱のことのもと、ここに飢渴を尋ぬるに、宝歴十一歳四月下旬より大出水にて麦作そんじ、同八月始めつた出水にて、秋も作物をとらず、饑にて歎く所に、同十二年四月下旬より九月まで出水十五度也。夫のみならず、十三年にも出水三度なり。よつて世の中静ならず、盜賊ならびに追剥は、よわきをかすめ其財をうばひて、一命を助けるものすこしきならず。大なるおそれ、或は子を捨てても我が命を助からんと思ひ、親をころしても我いきなるとする有様なり。饑ごへて命を失ふ老若数を知らず、歎きかなしむもの多し。……勿論我く百姓の義にて候得ば、御城え敵対仕まつり候義御座なく、召捕なされ候者どもおんかへし下されべく候。若御返し是なくに於は、及ばずながら我々御固めをおし破り、御城へ推参いたし、命限りに働らき、叶ざる時は討死せんと申上たり。兵内は武士に増る男なり。其外のやつばら、夫饑死せんより武士と戦、刃の下に討死せんとぞ罵りける。……拙者は上州せきむらの名主にて候ふが、あまたの百姓のおもへに集り候得共、この度、我一命を投うつも、惣百姓のなん義をすくはんとそんじ、十八郡へ廻状を出し候むね申あげる。是に依て惣百姓共は拷問を止められける。斯て関むらの名主、日々に拷もんなされしかども、元より覚悟の事なれば、一言も白状に及ばず也。……此年明和三年正月十七日、そふ百姓目代として、岡村兵内が首をきり、辻源五郎殿手代大竹藤市、新田郡関むらへ持参して、彼地へ獄門に掛られ候。……成瀬彦太郎始として、牢死二拾余人、八月十五日迄に御裁許なり。

§ 明和四年八月 山県大武、藤井右門死刑、竹内式部流罪。大武の「柳子新論」にいう。

「虎を饑えしめて之を伏するは、真に能く之を伏するに非ざる也。肥肉を見れば則ち猛なり。是れ特に馬と虎とのみならざる也。鳥窮すれば則ち啄し、獸窮すれば則ち擢す。尺蠖の屈するは、以て伸びんことを求むる也。竜蛇の蟄るるは、以て身を存する也。是の時に当りてや、英雄豪傑、或は身を殺して仁を成し、或は民を率ゐて義に徇ひ、忠信智勇の士、誘掖贊導して、以て天下を扇動せば、則ち饑者の食に就き、渴者の飲に就くが如く、奮然として起ち、靡然として従ひ、勢ひ自ら禦ぐ可からざる者有る也。冤を洗ぎ恥を雪ぐの心、恩に感じ報を図るの志、勇に奮い義に勵まば、則ち放伏の易きは、誦を通ずるの木、隙を通ず

るの堤にして、之に加ふるに疾風暴雨を以てする者と謂ふ可し。

§ 胆大小心録 一一〇

……老は(人々が)にくんで「茶やのはてじゃ」といふ。「いいや、たいこ持古なつたのじゃ」。こたへる。「穢多でさへなけりや御めんの人交わり。何にもせよかし、ただ今は山の大將我一人。お相手がござらしゃるまい」。

§ 天明七年 江戸大打こわし被檢挙者一覽より

喜三郎(24) 店借 左官 武州

与兵衛(35) 〃 足袋屋手間取 下総

直次郎(33) 〃 左官 江戸

清吉(40) 人宿寄子日雇 江戸

留五郎(28) 店借 大工・無宿 江戸

彦四郎(32) 〃 提灯張

金七(43) 店借同居 無職 下総

喜助(33) 店借 時の物商い 江戸

佐右衛門(25) 〃 魚商い 江戸

「汝しらず、近來の世の乱は朕なす事なり。」とは、何を知らぬといふ、朕とは誰なのか。院の絶望のあまりの深い怨恨に西行は追い討ちをかける。「こは浅ましき御こゝろばへをうけ給はるものかな。君はもとよりも総明の聞えましますば、王道のことわりはあきらめさせ給ふ。こゝろみに討ね請すべし」、この詰問のしかたは皮肉を通りこして慫慂無礼な悪意を露わにしている。西行はそれをわかり切った倫理的二者択一の問としてぶつけ追いつめる、「御謀叛は天の神の教給ふことわりにも違はじとおぼし立たせ給ふか。又みづからの人慾より計策給ふか。

詳に告せ給へ」と。その言葉の刺のある露骨さに注意を奪われるが、この間が相手を追いつめていく行先はたしかにこのような逃れようのない二者択一の中にしかない。それは「汝しらず」の核心、世の乱がやってくる秘密の根源に真直に突きさゝっていく意地悪さである。「汝聞け」とそれは開かれていく。

院の言葉が「若人道上より乱す則は、天の命に応じ、民の望に順ふて是を伐」ことの自信に満ちた主張、自己正当化とは程遠い自己弁護に閉じこもっていることを見極めておくならば、彼が自身の怨恨の正当化ではなく、それが止むを得ずやってきた秘密にまで溯って訴えるという体のものであることはすぐわかる。西行のいう「天の神の教」を体现する父に従いきれず「世にあらせ給ふほどは孝信をまもりて、勤色にも出さざりし」が、遂に武き志を発せざるを得ぬまでに拒み通された子の怨みを吐出しているのである。「犯せる罪もなきに」わけもわからずやってくる父の拒絶を語りながら、そこに「美福園院が妬みにさへられて」「天が下の事を後宮にかたらし給ふは父帝の罪」「牡鶏の晨する代を」等と顔を出す視線をみれば、父の拒否という見せかけのうしろに深く積る母の拒絶、女としての母に拒まれる子の孤立と怨みが見えてくるのはたやすい。「汝家を出でて仏に姪し、未来解脱の利慾を願ふ心より、人道をもて因果に引き入れ、堯舜のをしへを釈門に混じて朕を説や」とは、こうした家族内の此岸的軌轢を逃れて彼岸的觀念に遊び、足下の貧苦を生きる者の人道を因果的彼岸へ引入れ、未来解脱を説くイデオログへの怒りである。「天の命に応じ、民の望みに順ふ」という、天や民が母に拒まれる子の苦しみと重ねられていることは疑いない。これが時代社会への秋成の生い立ちを含めた位相の核心部であることは明らかであろう。

「西行はいよゝ恐るゝ色もなく座をすゝみて」、この対立はどこまで持ちこたえうるのか。西行は院を「人道のことわりをかりて慾塵をのがれ給はず」と院の攻撃のパターンをそのまま投げ返し、叛逆に倫理的意味を与えようと苦慮しているような姿勢を結果的についでくる。西行が持ちだした応神帝の子の兄弟が位をゆづり合った挿話

は、父の強大な威力を倒すことも、服して引き継ぐこともならぬ自己を発見した子らの当惑を語るものと考えられてしかるべきものが、「是天業を重んじ孝悌をまもり、忠をつくして人慾なし、」というように忠誠のすゝめに転化されている。つまり西行が自ら持ちだした挿話は彼の放浪を、そして歌への傾斜を、その根元のところで説明するもののはずであったのだ。彼のいう「人道のことわり」はまた孟子の書のごとく「末の世に神孫を奪ふて罪なしといふ敵」に論拠を与える「口賢しきをしへ」であってはならず、慾塵を論理化する方法であってはならぬのである。理論が現実上の利害から相対的に独立することは認められていず、「されば他国の聖の教も、こゝの國土にふさはしからぬことすくなからず」と当方の利に合わせた取捨が理論の全体性に逆って行われる。例句には、外敵の脅威を、内紛を抑える唯一の根拠として持ち出すという有様にもなる。また「殲の宮に肌膚もいまだ寒させたまはぬに、御旗なびかせ弓末ふり立て宝祚をあらそひ給ふは、不孝の罪これより劇しきはあらじ」という土俗的な慣習、「天下は神器なり。人のわたくしをもて奪ふとも得べからぬことわりなる」という觀念的超越性、神格化、「徳を布和を施し給はで、道ならぬみわざをもて代を亂し給ふ則は」という方法の反道徳性など、更に追打ちをかけるように「いにしへより例なき刑を得給ひて、かゝる鄙の國の土とならせ給ふなり」という因果論的恫喝まで、こゝには殆ど考えられうるすべての抑圧的論法がそろっている。

「院長嘘をつがせ給ひ」、もはや理解を求めるといふ姿勢は何の役にも立たぬことを知った院は、西行に語りかけ説明せんとする態度を維持できず投げ捨てる。以下の口調は殆ど独白にかわる。と同時に西行に対抗する張りを捨て裸になった院の姿は卑小そのものである。「日に三たびの御膳すゝむるよりは、まいりつかふる者もなし、只天とぶ鷹の小夜の枕におとづるゝを聞けば、都にや行くらんとなつかしく、暁の千鳥の洲崎にさわぐも、心をくだく種となる。烏の頭は白くなるとも都には還る期もあらねば、定て海畔の鬼とならんずらん」この独白の和歌的修

辭の過剰と度をすぎた誇張には未成熟で感傷的な心がむき出しになっているが、母に拒まれた子の孤独がどの程度のものかを示す。或いは拒まれることによって孤独によって却って独り立つことに成功したかどうかを。

浜千鳥跡はみやこにかよへども身は松山に音をのみぞ鳴

都へ向う心と松山に鳴く身とは交わることがない。このような分裂によく堪えられるものではない。少納言信西の「若兎咀の心にや」というはからいは、その分裂を清算する契機を与える。悪心懺悔の写経はそのまゝ裏返って「所詮此経を魔道に回向して恨をはるかさんと、一すちにおもひ定」めることとなる。都あるいは母への思いはその強い執着のまゝ憎しみへと形をかえる。これは「松山の浪にながれてこし船のやがてむなしくなりにけるかな」に深く埋めこまれた憤怒とは性質の違うもので、その間に千里の径庭がある。こゝには歴史のローラーの下に悲鳴をあげることもならぬまゝ消えていった者への眼が欠けている。消された者達の求めるのはむろん都ではない。

一すちにおもひ定て、指を破り血をもて願文をうつし、経とまゝもに志戸の海に沈てし後は、人にも見えず深く閉こもりて、ひとへに魔王となるべき大願をちかひしが、はた平治の乱ぞ出できぬる

結果として院が語ったのは歴史の時機であつて、彼が思っているような怨念ではない。彼の私的な怨念の感傷的な決断と歴史のタイミングが偶々合つてしまつたのだ。「はた平治の乱ぞ出できぬる」という表現が、その出合の偶然性を正確に言い当てている。だから、そのあと語られる通り、「まづ信頼が高き位を望む驕慢の心をさそふて義朝をかたらはしむ」というようにその動きは他の動機に寄生するにとゞまる。歴史は私的復讐の場にすぎない。またこの時、彼は盲目的な歴史の暴力、あの不変のA松山の浪のけしきVに化してしまつている。自らを生き埋めにした力にまた自ら転化する無残を演じている。「朕も其秋世をさりしかど、猶噴火熾にして尽ざるまゝに、終に大魔王となりて、三百余類の巨魁となる。朕けんぞくのなすところ、人の福を見ては転して禍とし、世の治る

を見ては乱を發さしむ。今やこれは巨大な卑しさであり、未熟なひねくれ者が偶々巨大化する歴史の氣まぐれしか窺えない。

だが、この無残な光景はこれを招来し追いつめてきた見者西行のなすところの帰結でもあるのだから「君かくまで魔界の悪業につながれて、仏土に億万里を隔給へばふたゝびいはじと只黙してむかひ居」ることにもなる。西行の論理は論理以下の怨念欲望をむき出させただけの効力しかなかったというように西行は敗北をする。西行の「事を正して罪をとふ」徹底した追求と断罪の裏にひそむものを、相手の院は鏡にうつすように演じてみせたともいえる。仏土と魔界は問い答える一対の表裏をなしているのだ。だが一方、論理を超えた者同志が論理を戦わせるかの如き様相の虚偽に疲れば、あとはたゞ目を働かせて見るより他はない。はじめて西行は「黙してむかひ居」るところを始める。何が見えてくるのか、空しく飛び交っていた言葉の奥にどんな光景があったのか。

「時に峯谷ゆすり動きて、風叢林を傾すが如く、沙石を空に卷上る。見る／＼一段の陰火君が膝の下より燃上りて、山も谷も昼のごとくあきらかなり。」

確かに目を開くことによって、観念の口をとぎすことによって、光景は動的に輝きだした、未だ「……の如き」比喩的な仮象を離れてはいないが、僞すわけでもなく昼であるわけでもない。視る西行の現実意識で向う側の光景は測られ描出されるだけだが、ともかくも「熾火熾にして……大魔王となり」という言葉が虚言でないということだけは判然とした。が、この光景は「朱をそゞぎたる竜顔に、荆の髮膝にかゝるまで乱れ、白眼を吊あげ、熱き嘘をくるしげにつがせ給ふ。」以下「かの讐敵こと／＼く此前の海に尽すべしと、御声谷峯に響て凄しさいふべくもあらず。」まで、すでに院の口をでた科白を対象的光景として改めて描写した域を少しも出てはいない。つまり特に新しい発見はないといえる。その旧態に合わせるかのように西行の「魔道の浅ましきありさまを見て涙しのぶに

堪ず」とその意識に変化はなく、また院の激しい怒りも目前の西行を無視したというより、眼中に入っていないものゝようで、西行は襲いかゝられもせず、落つき安心しきっている。彼らは背中合わせに「億万里を隔給へばふたゝびいはじ」なのである。こゝに八体験V或は八行為Vはない。院の姿の背後に、いかなる意味でも現実を蔽う騷然たる状景は浮きだしてこないのである。

よしや君昔の玉の床とてもかゝらんのちは何にかはせん

西行がこの随縁の歌を心あまりて高らかに吟ったのは、自身にも相手にも何ら新しき体験を今やのぞみえないことが明らかであるためで、訣別の相図に他ならぬが「此ことばを聞しめして感させ給ふやうなりしが、御面も和らぎ、陰火もやゝうすく消ゆくほどに」なったのは、この歌にまた昔の玉の床、あの都への訣別、流れてやがてむなしくなるものへ向っての一層の下降がすり込まれているともみえるその可能性ゆえであろう。「十日あまりの月は峯にかくれて、木のくれやみのあやなきに」、月は冒頭部院の出現に先だつて出で、すぐに隠れつゝけて遂に再び姿をみせずに終つたことを知る。雨の気配もまた「露いかばかり袂にふかゝりけん」で終つて不発だった。月の消失は直ちに兩月の夜の終わりで「ほどなくいなめの明けゆく空に」化鳥のかげを引くのか「朝鳥の音おもしろく鳴きわたれば」「山をくだりて庵に帰る」再び出発点の観念修行の地にある。だが、もうあの出発時と同じではない。「閑に終夜のことゝも思ひ出づるに」「深く慎みて人にもかたり出で」ぬ暗い部分を内に残してしまつたのだから。

其後十三年を経て治承三年の秋、平重盛病に係りて世を逝ぬれば、平相国入道、君をうらみて鳥羽の離宮に籠たてまつり、……幼主海に入らせたまへば、軍將たちものこりなく亡びしまで、露たがはざりしぞおそろしくもあやしき話柄なりけり。

この末尾が冒頭の逢坂の関守にゆるされて云々の美文に対応していることは明らかで、主語を欠いた地名めぐりの文体の共通性がそれを示すが、逢坂の関の先は文人的周遊、歌枕巡狩から少くとも歴史変動をたどる旅、軍將た

ちの跡を示す地名の流れをたどること、そして「おそろしくあやしき」消息にまでは彼をつれ出したといえる。西行の如く「かの国にかよふ人は、必ず幣をさゝげて齊ひまつるべき御神なりけらし」、自己を鏡にうつし、更にその足下にひろがる世界にまで足をのばそうと逢坂の関を越えようとするならば怖れねばならぬというのである。この忠告は守られるのか。

青々たる春の柳、家園に種ることなかれ。交りは軽薄の人と結ぶことなかれ。楊柳茂りやすくとも、秋の初風の吹くに耐めや。軽薄の人は交りやすくして亦速なり。楊柳いくたび春に染れども、軽薄の人は絶て訪ふ日なし。

この強い警告の背後にはよほどの苦く辛き目がある筈だ。猥雑な繁茂に潜む忌むべきものの侵入に対する強い自戒には恐怖さえ伴っているようだが、この強い調子は殆ど「白峯」の体験を抜いては納得し難い。「かの国にかよふ人は……」の注意が逢坂の関を越えて彼方に至ろうとする者へ向けられたものとすれば、この声は関の彼方の家園、あの廢園から流れてくる悲しみと怒りをこめた自戒とも聞える。十月はじめつかたの初秋の風が吹き送ってきたものは、通うことなき軽薄そのものゝ饒舌、繁茂しながら凋落する言葉に他ならなかったではないか。しかし楊柳はいくたびも春に染み、その都度軽薄の人は姿をかえ、絶えて訪ふ日なきが如くみえながらも、ひそかに通ってくるものもあるのだ。

博士あり。清貧を憩ひて、友とする書の外はすべて調度の絮煩を厭ふ。老母あり。孟子の操にゆづらず。常に紡績を事として左門がこゝろざしを助く

軽薄が軽薄として現われるのは余程の世界である。「清貧を憩ひ……調度の絮煩を厭ふ」という表現の赤面したくなるような非現実性はその背後に貧寒にして狷介な生活を思い浮かべなければ、それこそ軽薄そのものである



う。妹を土地の「頗富さかえ」たものに嫁がせ、彼らから「賢きを慕」われる彼等の村落社会における位置は想像がつく。「口腹の為に人を累さんや」という昂然たる自負は彼らの社会的位置から立ちのぼってくる。

かく、口腹の為という壁を超えているかの如き左門が、それにふさわしい「いにしへ今の物がたりして興ある時」、まさに「壁を隔て」て聞きとったものは「土家の風ありて卑しからぬと見し」ものゝ「邪熱劇しく」「痛楚声いともあはれ」なるものであった。清貧を憩ひて老母の紡績に助けられる者の前に現われた、或いは呼びよせたものが、「邪熱」にくるしみ「起臥も自はまかせられぬ」ものであったのは当然とはいえ、痛烈な一撃である。これを語る主が「何地の人ともさだかならぬに、主も思ひがけぬ過し出でて、こゝち惑い侍りぬ」というのは正直であるし、彼が生活者の立場から鋭く見ているのは疑いない。だがこの博士は「思ひがけぬ過」を却つてよしとするばかりか進んでそこへのめり込んでいく軽薄の物凄さを揮うのである。「病苦の人はしるべなき旅の空に此疾を憂ひ給ふは、わきて胸窮しくおはすべし。其やうをも看ばや」、左門はどんな共感を語っているのか。

「これより西の困の人と見ゆるが、伴なひに後れしよしにて一宿を求めらるゝに……其夜邪熱劇しく、起伏も自らはまかせられぬを……何地の人ともさだかならぬに」

「倫の人にはあらじを、病深きと見えて、面は黄に、肌黒く瘦、古き釜のうへに悶へ伏す。人なつかしげに左門を見て、湯ひとつ恵み給へといふ。」

§ 飢人共の咄に最早暖気と成背物も萌出る故如何様ともして在所へ立帰り仮令餓死する迄も一旦はカ様に思ひ立（お救小屋を）引退たりといへる、其飢人の有様歩行も自在ならず互に手を取組助け合顔色青々として更に血色なく眼引つり歯黄にして言語も定かならず、衰ひ疲瘦せ候者共十に八九遂には在所へも帰り届かず、多分は道路野中にて餓死に及といへり、衰れといわんも言語に述べたし、眼もあてられぬ次第也。 「自然未聞記」宝曆南部飢饉記事

§ 辰春に至りては別て御城下内並町方々宿場、浜方に限らず物貰ひ食を乞にあるくもの夥敷、古椀を抱へ箸を腰にさし、かな

しき声にて御助けと呼声を永く引、色蒼醜疲衰へ顔手足よこれ、破着物を着、素足にて老若男女夥舗あるくといへ共、面々も食乏しければあはれとは思ひながら心に任せず、食物の残り抔少しつゝ與るもあり、貫食中々足らざるゆへ、多は飢死せり、いつくのもの共知ざれば、御城下は蒼龍寺の垣添の外東北の角と積雲寺の地内へ大なる穴を掘置、死骸を選び入れる事何千人共數不知、誠に哀といふもはかりなし、

「天明救荒録」天明四年相馬藩記録

§ 翌年秋近く大豆畑いまた実のらざるを盜取し百生有て見咎られ、夫婦男女の子都合親子五人を同村の者共、捕押繩にてからけ或測へいかにわぶると雖きかずして沈め殺せしに、其中に達者なるは遊き上らんとするを鉞或は棒ちぎり木にて打擲き打殺して沈たりとぞ、遂に親子五人を殺し尽せりと、

「飢饉考」 天明五年南部藩

左門は主の「瘟病は人を過つ物と聞ゆるから……立ちよりて身を害し給ふことなかれ」という村落外からの疫神の如き浮浪人への貧しく険しい眼つきに同調せず、「死生命あり。何の病か人に伝ふべき。これらは愚俗のことばにて吾們はとらず」と云い切る。これは次の如き発言とも軌を一にする

人病メル時マドヒヲ解キ、治療ヲ全センコトヲ欲ス。故ニ亦咒詛家相及ヒ世俗ノ誤リ來ル處ノ医事教条ヲシリヘニ附ス

又法者病人ニ呪詛ノサハリ有コトヲ云ヘハ、世俗サハリヲ以テ煩ヘリトシテ其治ヲ全セザル者多シ。タトヒ呪詛スル者アリト云ヘトモ、決シテ障リトナル者ニアラズ。私ノ恨ヲ以テ神明ニ訴トモ、神ハ聰明正直ナル者ナレバ、悪事ニクミシ、人ヲ殺シ、人ヲ疾シメ玉ハンヤ、若殺スベク病シムベキ罪ナクシテコレヲ呪詛セバ、呪詛スル人コソ罪アリテカヘツテ神明ノ罰ニ當ルベシ。コレヲ惡デ人ノ死ヲ欲シ、病ヲ欲スルハ惑ナリ。死生有命富貴在天ト云リ、

「人狐丹惑談」 文政元年刊

この神明を儒学の理に置き換えれば、寸分違わぬといってよい。清貧を憩い口腹の為に人を累さんやという、地を這う生活からの浮遊は一方で村落社会の近視眼的利害から彼を解放する。しかし、かわりにそこに彼が見出すものは、彼を解き放った当のレンズを通して捉えられたものであることもまた致し方はない。「倫の人にはあらじ」「病を看ること同胞のごとく、まことに捨てがたきありさま」などの表現は、この時△病▽とは殆ど自己の狂気の

投影に他ならぬという事情を説明する。清貧を憚りて書を友とし口腹の爲に人を累さずという狂熱の。だから「かくまで漂客を恵み給ふ。死すとも御心に報ひたてまつらん。」といった彼の心は実は左門の倫理的意味づけのヴェールを通りぬけた彼の奥底の「陰徳をたふとみて」発されたものであった。丁度西行が詠んだ歌のイデオロギーの奥にこめられてしまった心に院が共感を示して現われたように。だが、この誓いの意味するところは何なのか、彼への共感が左門をどのような地点へつれ出さずにはおかないということの予言なのか。

左門の陰徳を尊んで己が身上を彼が語り明かすようになって、或はそうなれば一層、彼は博士たる左門の精神に応じた姿を強めて現われる。彼は兵書の手を察め、また密の使にえらばれるという、最も権謀術数血なまぐさい暴力の嵐に立会うことに身心ともにつかっている筈なのに、「故なき所に永く居らじと、己が身ひとつを竊みて國に還る」倫理的観念への忠誠だけに昇華された姿しか現わしてこないのである。それでも目をそこに凝らせば、「故なき所に永く居らじと……國に還る路に、此疾にかゝり、……身にあまりたる御恩にこそ。吾半生の命をもて必ず報ひたてまつらん」という男と「見る所を忍びざるは人たるものゝ心なるべければ……猶逗留っていたはり給へ」と返答する者のやりとり、更にはそれでもやがて「吾近江を遁来りしも、雲州の動静を見んためなれば、一たび下向てやがて帰り来り……今のわかれを給へ」といつて西をさして帰っていった者の背後に、先の「最早暖氣と成膏物も萌出る故、如何ともして在所へ立帰り假令餓死する迄も」と御救小屋を立出でて野辺に倒れた人々や「最初町住居の者共夜具等を菰菰に包ん我先と争ひ御小屋入せしか、以の外出入も自由ならず甚窮屈にて火にあたるべき様もなく、儂の御粥にていかて命助るべき、迎も餓死する身の我家に帰りて死ん杯と兩三日を過て去る者も多かりし、遠近在の者共は暫く堪ひ忍しか、是も又兎角在所に帰て喰ぬ迄も火にあたり親子一所に死ん。此寒氣に纒の御粥にて飢も凌かたく寒へ死んよりはとて日々に入出入武拾人參拾人引も切らす。然るに何くへ行たり、神飢

を凌べき手便もなく追日行詰りて、再ひ御小屋に戻り来る者夥敷。「頃日飢に疲るゝ者小屋に入も恥辱とや思ひけん。子供を川へ投入其身も直に入水する者日々の様子聞及こと夥し」(「自然未聞記」と流亡する人々の群があり、その一方でこれらの人々を尻目に、「箇様に世上一統の凶年に御所を離れ他所はよかるべきと、其穿鑿もなく致出奔は愚か也、……家内一致に申合可成丈儉約し種々何分にも工面差略をも尽し、成丈存命夫共に行つまりたらは無抛、其時死する覚悟にてよかるべし」(「天明救荒録」などと非情な教訓をのべるものゝある時に、「或人曰、貧福は天性なれば賤しく貧なり迎必諷るへからず、……常に見知の顔たる者も忽ち袖乞となれば笑て、最早人性捨たり杯言へり。畢竟常に心得悪しきか故也杯笑ひ誘り、思ひの外賤しめ諷り乞食同前の挨拶に及ぬ、慎へきの専要なるへし、明日はいかなる我身に災あらんも斗るべからすと云々」(「自然未聞記」と書留め「流民の咄に聞も身の毛豕立恐しさいわん方なく其日一日の夫食を与へて諸共になくく返しぬ」とした人もあったのである。

左門の「見る所を忍びざる」はまさにその病の惨状にあったとせねばならぬ。しかし「瘧病は人を過つ物と聞ゆるから家童らもあへてかしこに行かしめず」という世界にあって、これらは愚俗のことばにて吾門はとらずと揚言して看病し、厚き詞ををさむるに故なしともいつて、そうしたいわば特異な状態が「物みな平生に邇くぞなりにける」とこの世界に瀰漫するのである。そうなったとき、「日夜交はりて物がたりするに、赤穴も諸子百家の事おろくかたり出でて、問ひわきまふる心愚ならず」と判明してくるのだが、このおろくかたり出でながらも問ひわきまえる、口べただがつぼを抑えた様の仲々どうして愚ならざる具合というのが、どのような生活の中から生れる態度であるかも明らかであろう。「兵機のことわりはをさくしく聞えければ」、諸子百家とか兵機とか左門の欲する夢に照応した修飾をはずしてみれば、このをさくしさが地に足のついた生活者の体験による裏うちを意味し、まさにその点で「ひとつとして相ともにたがふ心もなく、かつ感、かつ喜びて、終に兄弟の盟をなす」に至る

のである。むしろ「よき友もとめたりとて、日夜交はりて物がたりする」ほどの耽溺を示しているのは左門の方であるから、「相ともに」とは彼の夢もまじっているであろう。彼の方が一方的に魅せられていったことははじめから一貫していてとう／＼兄弟の盟Vによって相手をつなぎとめるに至る。だが、この「終に兄弟の盟をなす」とは何なのか。

こゝにはまたしてもA母Vが中心からんでくる。赤穴は「伯氏たるべき礼義をさめて」つまり兄弟の盟の申出を受け容れることを示しているのである。「吾父母に離れまいらせていとも久し。賢弟が老母は即吾母なれば、あらたに拝みたてまつらんことを願ふ。老母あはれみてをさなき心を背給はんや」と母への対面を条件のように出してきたのに対し左門もまた「母なる者常に我が孤独を憂ふ。信ある言を告なば齡も延びなんに」と答えている。義兄弟とはA母Vを共有する間柄、或いはA母Vから子と認められた者同志という、母を間を立てた関係なのだ。そして赤穴のAをさなき心Vで母を求める明けひろげた一途な願いに對し、殆ど自身の母に對する感情的姿勢を明らかたにしていない左門の控えた表現や「常にわが孤独を憂ふ」から窺われる彼の母に對する閉鎖性という両者の對照の様相が見られるところを推すならば、赤穴のストレートな表出こそ、実は左門の孤独、母に拒まれたと感じている息子心の内に秘められた叫びに他ならぬことが透かされてくるだろう。この人間関係に、父や母の姿を見かけず、かわりに義兄弟にホモセクシュアルな雰囲気さえも感じとれるというのも、そこに埋めこまれているのが実は左門の禁欲的な顔の下にわだかまる、母への思慕の屈折したあり方によるだろう。老母は「吾子不才にて、学ぶ所時にはあはず青雲の便りを失なふ。ねがふは捨てずして」と子の鬱屈と漂流に明け暮れる孤独を、いわば息子との距離を気にかけている様子を示す。母のいう世に志を得ぬ孤立はこちらの左門からは殆ど母との疎通を欠く孤絶と重なってみえるはずである。だから赤穴が「大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足らず」といったとき、青

雲の便りを失なふことのこの二重の結び目を睨んでいたであらう。

また「不才にて学ぶ所時にはあはず青雲の便りを失なふ」とは真直に左門の浮遊、いわば秋成の漂流を衝いてくる、赤穴とは何だったのか、彼の背後に誰が、どんな現実が控えていたのかに気を回すならば。左門の学は赤穴を呼びこみ彼を通してしか「老母あはれみてをさなき心を背給はんや」と言い出せなかったし、秋成の学は赤穴の背後に山積する飢渴者の死体と怨恨をそれとして描きとる方法とはなりえなかった。とすれば、これは秋成の自身への批判であり痛恨の思いに他ならぬこと、しかも最も聴くべき人の口からそれと刺された痛みをこめた表現と見てとれる。

きのふけふ咲きぬると見し尾上の花も散りはて、涼しき風による浪に、とは、でも、しるき夏の初になりぬ。

これは明らかに秋の初風の吹き出しであること問はでも著きである。そしてこの光景の陰に青々たる春の柳は既に家園に植えられてしまっており、今その茂りの時を迎え、そのまま凋落の秋に向って時は流れだしてしまっている。あの厳しい忠告と危惧に反して。左門の夢と情熱の影は兄弟の盟となつて勢一杯に繁茂している。こゝに至つて今まで仮に彼の前に姿を現わしていたにすぎぬ者が、本来の居処たるべき地へ向つて旅立つ、本来の姿勢を見せる。そして左門の盟がこの本来の姿においても持続できるかどうかの試練を受ける。「月日は逝やすし。おそくとも此秋は過ぎ」この試練の時が「白峯」以来の秋に向つており、知らぬまに柳を呼び込んだ、時の速さはこれより一層早くなるともいう。左門は彼の前途を、己れの夢の先き行きの急を予感するのか、せき立てられるように尋ねるのに対し、赤穴はすこぶる冷やかな調子で「重陽の佳節をもて」その日とするという。重陽とは「陽氣所発金石亦透、精神一到何事不成」（「朱子語錄」）という陽氣の過度、過熱ではないのか。それは楊柳の猥雑ともいえる繁茂が凋落の季節の外観のうち繰りひろげられる時なのではないか。だのに迎える左門は余りにも控え目にすぎ

一枝の菊花に薄き酒を備えて待つという。楊柳の動物的精神性に対するに植物的な精神性をもってしたようにみえる。「九月九日汝が家当有災厄」（「続齊諧記」）という災厄はどうやってくるのか。

下枝の茱萸色づき、垣根の野ら菊艶ひやかな九月になり、近づく災厄を感じてかそれを防ぐ茱萸や菊もその用意を怠らぬし、人もまた「黄菊しら菊二枝三枝小瓶に挿、盞をかたふけて酒飯の設を」して来るべき凶変に備える。この時、老母がいう「かの八雲たつ圃は山陰の果にありて、こゝには百里を隔つると聞けば、けふとも定めがたきに、其來しを見ても物すとも遅からじ」この突然の介入は彼の熱心な備えに一瞬水をさす。そして百里の遠さ不確実さという日常的判断を持ちこみ、彼の過熱をさますもののように見えるが、赤穴のいう通り「あら玉の月日はやぐ経ゆきて」更に周囲の景がすべて凶変近きことを示し、彼左門もまた「いつよりも蚤く起出でて」用意を怠らなかつたのは、それを感じたからに他ならないのだから、老母の言はむしろ指呼の間に来つた黒影に対する備えを怠らせ、不意をつかせようとするものだ。或は左門を凶変への無防備な直面へと導くものである。と同時に「かの八雲たつ圃は山陰の果にありて」と訪れくるものの背反性、重陽の日を反転させた陰極からやってくることを明らかにしている。この時左門は「赤穴は信ある武士なれば」と倫理という陽光のもとに彼を望みながら、実は陰惨な凶変に「美酒（薄き酒でない）を沾ひ鮮魚を宰て厨に備」えてそれを防ぐのに大わらわである。彼は待ち望みつゝ手はこれを払うという背反に陥っているのに気づかぬ。或いは八信Vなるものゝ影に予期せずして身構えている。

此日や天晴て、千里に雲のたちあもなく、草枕旅ゆく人々の群くかたりゆくは、けふは誰某がよき京入なる。此度の商物によき徳とるべき祥になんとて過ぐ。

この空模様があまりに暗れすぎていることを思えば、八雲たつ圃からの来訪者の気配、すなわち八雨Vの気配は却って満ちているのだ。「背雲の輕靡日すら小雨そぼふるがごとし」（白峯）という、この雨月物語の世界の論

理に思いをひそめれば。或いはこの口腹の為ならざる世界を蔽う空の、むなしいまでの青さには左門の期待に応える何者もなく、そこには虚無の死臭が早くも立ちこめているというように。旅人は空模様を口腹の為に結びつけながら左門の眼前を過ぎるが、その彼らとても「日和はかばかりよかりしものを……若き男は却物怯して、銭おほく費やす」のであり、「このほとりの渡りは必ず怯べし。な悲給ひそ」とおのゝいてるし、更に馬の口とる男は近づくものゝ氣配にであらう「腹だたしげに」いらだち「此死馬は眼をもはたけぬか」と眼を見開いてそれを見よとむち打つのである。

「午時もやゝかたぶきぬれど、待ちつる人は來らず」しかし、もうそのあたりに來ているものがある。「西に沈む日に、宿り急ぐ足のせはしげなるを見るにも」、人々は日没と共にやってくるものに追われるように急ぐというのに、その人々が逃れんとする「外の方」の闇「のみまもられて心酔るが如」き人が左門である。彼が人信義Vの現われるのを待ち望み、窺き入れているのは、人々がかように逃れ來たる千里に雲のたちぬもない闇の奥なのである。彼はめくるめきに堪えて凝視する。そこへまた老母の声がある。「人の心の秋にはあらずとも菊の色こきはけふのみかは」とは、この凶夢が今日ばかりではない、人の心の秋ならず、秋の初風の吹くに耐えめやという秋は、目を凝らしさえさればいつでもあったし、またこれからもあるだろうという恐しい通告を含む。「誰がまことよりしぐれ初めけむ」（続後拾遺）の歌のとおり、あたりに立ちこめてきた闇あるいは人雨Vの氣配に訪れてきている人信Vを感じ、「帰りくるまことだにあらば、空は時雨にうつりゆくとも何をか怨むべき」今こそその時ではないかと左門に凝視することをすゝめつゝ、一方で「入りて臥もして、又翌の日を待つべし」と緊張を和らげ、またその眼を持續し日常化することを求める。「否みがたく、母をすかして前に臥しめ」と母は彼になだめられる枠組の中におさまってはいるが、この母の強韌さが彼に、拒まれていると感じさせる源かもしれぬ。



もしやと戸の外に出でて見れば、銀河影きえんぐに氷輪我のみを照して淋しきに、軒守る犬の吼る声すみわたり、浦浪の音をこゝもとにたちくるやうなり。月の光も山の際に陰くなれば、今はとて戸を閉て入らんとするに、たゞ看。おぼろなる黒影の中に人ありて、風の随來るをあやしと見れば赤穴宗右衛門なり。

文體は急變する。左門は自ら語りまた語られる。銀河影きえんぐに明滅しながら衰え消えていくのは彼のA信Vへの期待であろうが、と共に支えを失った淋しき我のみを闇の中に照らし出すA月Vがある。この氷輪に刺し貫かれて消失したのは「口腹の為に人を累さんや」というあのエゴである。その時、世界は己れを中心に荒涼とした静寂とそれに交錯して流れるものリズムで包むさまを見せるが、それも一瞬の後に陰い闇の中に消えようとする。これは左門の内なる世界の、孤立のさまである。彼は見捨てられ、闇に吞まれるのか。軒守る犬の闇の中から迫る孤立化の力にたえかねるような悲鳴は遠心的に拡がり世界を拡げはするが、それはむなしく虚無の世界にすみ渡るだけで応えるものもないようだが、犬の声の消えていくあたり、闇の奥から顫動しつゝ求心的に寄せてくるものもまたあるのである。「もしやと戸の外に出」た時の光景といえ、壁を隔て人の痛楚声いともあはれに聞え、それに応じて左門が吾們はとらずといて忠告を退けて「戸を推て入りつも其人を見」たあの異次元の境なるA戸Vを思い出さねばならぬが、今はその戸の向うに暗闇の他何も見出せぬかのように思い「今はとて戸を閉て入らんとする」時、「おぼろなる黒影の中に人ありて」つまり世界を包む暗闇の中心、陰極に、その凝集したものであるA人Vが浦浪の音を吹き送ってくる「風の随來る」のは、やはり孤犬の悲鳴に応えたものであろう。

あるいは、この戸外の風景は冷い死の影しか見出せぬ廃墟・殆ど自然に立ち返らんとする死の村のさまなのだとも。「こゝには百里を隔つると聞」く地の果ての、陰極・地獄の風景が、A戸Vを開ければすぐひろがっている。このA戸Vは米相場の値上りにわく大阪の地と遠く隔たる東北の寒村の荒涼とを隔てていたA壁Vにあけられた唯

一の八戸Vなのである。それは一瞬八氷輪Vに照らし出され、すぐ「月の光も山の端に陰くな」り見えなくなり八戸Vもまた閉められようとする。雨月の八戸Vはかように照らすものの謂なのだ。そして、こゝ八戸Vの外は影のように寄り添い彼を戸外へとそれとなく導いてきたあの母はもう居ず、彼一人立ってこの死の空間を直視せねばならぬところでもある。

§ やうやく五日目に仙台の古渠江立戻り、家寺内江入て見れば絶て人の通りし跡もなく、手をもってくさむらを押分け行候へは、犬の声、鳥の騒ぐに驚き、如何成る事そと傍を見れば、墓場に人の屍を喰争ふにて在之、御堂は軒傾き壁落て、久敷も人の住し跡にもあらず。これはいかに家内なりゆき誰人に伺ん方もなく、桑田変して海となる、今も古も異ならずと、涙ながら寺内を立出、門前のしるへの家を伺へは、これまた戸垣打破れ、曾て人住候跡なし。其隣近辺も皆々同事故、それより町役人の家によきて様子を承候へは、二月中旬に不残死失候由。 「孫謀録」 天明四年創備記事

§ 此時京都などは西国北国近江の国など大躰中分の作にて餓死に及ぶ程の事なけれども、翌辰年(天明四年)五月六月米の価頗りに貴く銀百卅匁位なりしが、前年卯年秋より町家の中より所々に施行あり……今年大坂にて米をひさく商人あり、制禁を犯し数万石の米を買メ隠し置り……(天明六年)此事追々京都へ聞へしかば日々相場飛が如くに引上黒米白米差別なく一石の価百三十匁迄に至り、五月晦日より六月三日迄の間は米一舁を売者なく富豪の町家にも飯米既に尽露命を繋ぐによしなからんとす、況や其余の人家死を且暮に待斗也。 「五穀無尽蔵」

だから、この廢墟から風のまに／＼よろほひくるものがあれば、殆ど奇蹟的であり、そしてこれを待ち得れば彼の口を通して、聞くべきことを聞けるかもしれないのである。それこそ山「陰の果」の惨状を、そこで彼の体験した地獄の光景をである。そこでは多分、この「大丈夫は義を重しとす」と言う武士姿の赤穴と斃死するばかりの百姓とは一体化する筈だ。彼らが共に現実の基底に立った姿を示す点で。

しかし、現われた黒影中の人影を「赤穴宗右衛門なり」と言い取った瞬間から失墜が始まる。「盟たがはで来り給

ふことのうれしきよ」という迎えの言葉に早くも待つ者の、倫理の面をつけたエゴイズムがきざしはじめている。これでは義士を期待してそれが満たされた嬉しさにすぎぬではないか。これに應じて相手はやはり、「只黙頭て物をもいはである」ばかりである。更にこの相手の沈黙は左門を苛立たせ、一層詰問的口物のうちへ彼をのめりこませる惨状がやってくる。「兄長来り給ふことの遅かりしに」「己が心なり。いやしみ給ふことなかれ」と語気を強めてくる左門に対し「頭を搔てとゞめつも、更に物をもいはでぞある」「袖をもて面を掩ひ其臭を嫌放るに似たり」と一層拒絶のさまを露わにしてくる。「赤穴猶答へもせで、長嘘をつぎつゝしばししていふ」とう／＼左門は掌中の玉を迫いづめ握りつぶしてしまった。かつて「院長嘘をつがせ給ひ、今事を正して罪をとぶ、ことわりなきにあらず。されどいかにせん」と崇徳院を迫いづめ嘆かせた西行のやり口はそのまゝ左門に、戸惑ではなく共感をもちながら却って相手を迫いづめる想像力の欠如というふうに引き継がれている。「賢弟が信ある響応をなどいなむべきことわりやあらん」全く院と同じ言い方をする。

「欺くに詞なければ、実をもて告るなり。必ずしもあやしみ給ひそ」と切り出した苦しげな出方に左門と赤穴の順逆の關係が動かし難いものとして抑えられた上で、実をもて告げられてくるのがわかる。これは最も左門にとって聞きにくい、耳を蔽わずに居られぬことが通告されるということなのだ。

吾は陽世の人にあらず、きたなき靈のかりに形を見えつるなり。

これは「死生命あり」とも「怪力乱神を語らず」ともいう博士の禁じている世界であり、不可触としてきたところである。左門が「何ゆえにこのあやしきをかたり出で給ふや。更に夢ともおぼえ侍らず」と狼狽するのも無理はないが、向うは左門の立つゝ陽世ゝ浄き人ゝという土台をゆすり、その仮面の対極ゝ陰魂ゝ不浄ゝ虚仮ゝなどをもつて迫っているのであり、「実をもて告ぐる」言葉は鋭く蔽しい。しかし、その対極もやはり左門の立つ博

士の言葉で語られてくるので、言葉の裏にその真相は隠れていることもまた変りない。だから左門が「実」を真に求めるならば赤穴の言葉の心を想像力によって射ち抜かねばならないのであるが。

赤穴は前の城主尼子経久の所業のこととして「万夫の雄人に勝れ、よく士卒を習練といへども、智を用うるに狐疑の心おほくして、腹心爪牙の家の子なし。……去らんとすれば、経久怨める色ありて、丹治に令し、吾を大城の外にはなたずして、遂にけふに至らしむ。」と語ったが、これは赤穴の覚悟してその中に入り、そこを己れの場とした修羅の巷であり、その険悪な相貌はまた赤穴のものである筈だ。「仮に其詞を容て、つらく経久がなす所を見るに……永く居りて益なきを思ひて」という赤穴の言葉は、彼がかような修羅を生きる用心深さ、そこに生きるために彼もまた敵と同様に身につけねばならなかった「智を用うるに狐疑の心おほくして、腹心爪牙の家の子なし」という境地、「密の使にえらばれ」た者の姿勢を示すものに他ならない。菊花の約とは、かような修羅場をそれと知って汚れながら生きる者が、唯一の窓のように自由に向って開いた夢だったといひ。そうした赤穴を真に追いつめたのは周囲の敵ではない。「吾を大城の外にはなたずして、遂にけふにいたらしむ」るのは、彼が覚悟して選んだ修羅場の常の相である。

「此約にたがふものならば、賢弟吾を何ものとかせんと、ひたすら思ひ沈めども通るゝにすべなし。」、赤穴を縛っていたものの不用意な強さがうかゞわれる。「賢弟吾を何ものとかせんと」ひたすら彼を思い沈ませた左門の過重な期待こそ、赤穴を「魂よく一日に千里をもゆく」という幻想に飛躍させた圧力である。これが「見る所を忍びざるは人たるものゝ心なるべし」という左門の詞とそれに「吾半生の命をもて必ず報ひたてまつらん」と応じた赤穴の至りついた悲惨な帰結であった。要するに左門の「口腹の為に人を累さんや」という主義主張は人生の苦境を喘ぎつゝ生きる者に負担をかけ、彼の夢を無理な条件のもとに現実化させる飛躍と自滅を強いたのである。「この

心をあはれみ給へ」という赤穴の言葉は苦く重くのしかかってくるはずである。「今は永きわかれなり。只母公によくつかへ給へとて座を立つと見しがかき消て見えなくなりける。」遂に左門の見た、見ようとした倫理的な夢想、菊花の約は一片の悪夢に終った。多大のつぐない切れぬ犠牲を出して。左門の観念的な夢想に何かを托して斃れた者は我慢強くかつ優しく、殆ど左門を怨み責めることがなかった。

赤穴が左門の前に多大の犠牲を払ってまで現われて、文を友とする他を知らぬ男に向って言うべきことがあるとするならば、利害を説き力をもって押してやる虎狼の世界に「故なき所に永く居らじ」「永く居りて益なきを思ひて……去」という姿勢を貫くこと、つまり左門のいう「口腹の為に人を累さんや」という信条の実践のさま以外にはありえない。それこそ左門に「問ひわきまふる心愚ならず」と感じさせた力であろう。しかも赤穴の「永く居らじ」「去んとす」という消極的表現の裏には「経久を亡ぼし給へ」という転覆の意図があり、だから「去んとすれば、経久怨める色ありて、丹治に令し、吾を大城の外にはなたずして、遂にけふにいたらしむ」となったのである。

この赤穴の牙はこのあとの左門の丹治弾劾の言葉の中にも「商鞅年少しといへども奇才あり。王若此人を用る給はずば、これを殺しても境を出だすことなかれ。他の国にゆかしめば必ずも後の禍となるべし」という、商鞅の革命性として、より強く表現されてくる。「大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足ず」と述べる赤穴が重んじた義に基く行動が二度とも現政権への反逆というように表現されてきているところには、明らかに謀叛人崇徳院から流れ下る怨みを呑んで死ぬる者の姿をみる事ができる。

だが赤穴は院と異り、その私的な怨みを左門に全く明かしてはいない。「国人大かた経久が勢ひに服て、塩冶の恩を顧るものなし」という君への信義という、崇徳院の余りにも私的な怨恨の反動とも思える観念性の中にその姿

を隠している。赤穴が「欺くに詞なければ、実をもて告るなり」といったとき、彼が告げようとしたのはその隠れた彼の怨みの心でなければならぬ。「かくまで漂客を恵」む陰徳と赤穴が称えたのは「見る所を忍びざるは人たるものの心」という、左門の眼前の現実に対する倫理性であった。具体的にいえば「病苦の人はしるべき旅の空に此疾を憂ひ給ふは、わきて胸窮しくおはすべし」という難民、行路病者へのやゝ観念的な正義感であった。「此約にたがふものならば、賢弟吾を何ものとかせんと、ひたすら思ひ沈」んだのは、左門の観念的で性急だが、他意のないこの正義感に訴えるべきことを、赤穴の方もまた持っていたからに相違ない。友とする書の外を知らぬ左門に伝うべきことがあるとすれば、身をもって信義を貫く生きざま、信義と牢死が不可分の表裏をなす現実を生きる姿以外にはなからう。それだけが「吾半生の命もて必ず報ひたてまつらん」と命をかけて伝えるに価することであろう。だが、それでは信義と牢舎は、単なる一大名の内紛からむ旧主への忠誠とそれをはゞむ者の圧力というのでは、それはやはり赤穴のいう「利害」にすぎないであろう。だが遂に彼は「この心をあはれみ給へ」というのみで、その人心は自ら刃に伏して菊花の約についたという約束のための約束の中に塗りこめられてしまった。

しかし左門はよくこの人心を讀みとったようである。それは赤穴の「骨を蔵めて信を全うせん」という、左門が赤穴の志に応えて彼の志を継ごうと決意して出雲に下ることに表われる。だが左門は赤穴の口から、その伝えるべき志を聞くことができなかった。そして又左門の信を全うする行為も、殆ど義兄の仇を正義の名に於て討つ私怨の姿に蔽われ、赤穴が左門にどんな実を告げ、左門もそれをどのような意味で受けとめて、その私闘の如き行為の中に信義をこめていったのかは隠れたまゝ終るのである。

たゞ、左門と赤穴を結ぶつなぎ目の核心が難民的な行路病者とそれを「必ず救ひまいらすべし」という決意であることに思いをひそめれば、陰徳大平記に拠る仮托の背後に、

保・平ののちに至り、朝政漸く衰え、壽・治の乱、ついに東夷に移り、万機のこと、一切武断、陪臣権を専らにし、隆立その私に出ず。ことときにあたつてや、先生の礼楽、蔑焉として地を払えり。……数世ののちに迷ひ、豪傑交々起こり、おのおの一方に拠り、龍驤虎奔、相奪い相害い、窺己あることなし。姦賊ことを謀り、戎蛮これ募う。首に巾帽なく、衣に領袖なし。驕傲徳を称し、暴逆功に仗る。このときにあたりて、一二はその民を憂うる者、またただ戦国の弊を承け、苟且の政、在再日を送るのみ。なんぞ名教のよるところを知らんや。すなわち民の蚩々たる者。またいづくんぞその土を守らん。またいづくんぞその身を安んぜん。……

是の時に当りてや、英雄豪傑、或は身を殺して仁を成し、或は民を率ひて義に徇ひ、忠信智勇の士、誘掖贊導して、以て天下を扇導せば、則ち饑者の食に就き、渴者の飲に就くが如く、奮然として起ち、靡然として従ひ、勢ひ自ら禦く可からざる者有る也。冤を洗ぎ恥を雪ぐの心、恩に感じ報を図るの志、勇に奮い義に励まば、則ち放伐の易きは、諷を連するの木、隙を連するの堤にして、之に加ふるに疾風暴雨を以てする者と謂ふ可し

「柳子新論」

という如きことを書き著わし、また農民斗争とも関係して、明和四年八月、死刑に処せられた山県大弐ら、いわゆる明和事件の関係者や、溯って宝暦五年の奥羽大凶作の翌々年から取調べられ宝暦七年追放された竹内式部らの面影を赤穴の背後に見ても不当とはいえないであろう。赤穴の菊花の約にかけた熱意とその沈黙は「白峯」の崇徳院のいう「汝しらず、近來の世の乱は朕なす事なり……見よくやがて天が下に大乱を生ぜしめん」を引継いでいるのである。そして赤穴を、飢渴した行路病者のイメージと大弐、式部ら反幕アジテターの像の間に置いてみれば、一層尖鋭な姿が浮かび出る。そのとき、彼の信義が飢渴に及び路頭に倒れ伏す者達に対するものであり、またそのこと以外に左門に伝えるべきことはありえない。逆にだからこそ、それは約束のための約束の陰に埋めこまれ隠されねばならなかったともいえる。

左門慌忙とさめんとすれば、陰風に眼くらみて行方をしらず。俯向につまづき倒れたるまゝに、声を放て大に哭く。老母日さ

め驚き立ちて、左門がある所を見れば、

左門の昏倒に入れ替り、老母のめざめが接するというタイミングには、これまでの彼老母の現われ方と同様に、左門と母との内的な関係を内側に隠している。左門の「こゝろざし」に常に紡績を事としてこれを助けてきた老母の内にあるのは、というより左門が見たがったものは殆どそのまま赤穴が人実をもて告げつけた、彼の苦い批判と優しい心根に投影しているとみてよい。赤穴を見失い、次の瞬間彼の前に現われて寄り添い「いそがはしく扶起して、いかに」と問うのはこの老母なのである。母の口から聞きたかったものこそ、赤穴のもたらした言葉であろう。がそうした関係は構成の中に強く押し隠されており「伯氏赤穴が約にたがふを怨るとならば、明日なんもし来るには言なからんものを。汝かくまでをさなくも愚なるかとつよく諫るに」というように、恰も老母の感ちがいであるかのように装われている。それでも「赤穴が約にたがふを怨るとならば」という指摘は左門の性癖を鋭く衝いており、その点で「汝かくまでをさなくも愚なるか」との諫めには、抑えに抑えた苛立ちさえ見える。「牢裏に繋がるゝ人は夢にも赦さるゝを見え、渴するものは夢に漿水を飲といへり。汝も又さる類にやあらん。よく心を静むべし」と母は続ける。この喩えは殆ど実をもて告ぐる類である。それは左門の倫理の牢裏に繋かれ、生きた人間の水々しさに渴するさまを射当ると共に一方で、左門の夢見た人牢裏に繋がるゝ人Vと人渴して夢に漿水（おもゆ）を飲む者Vとの親近性或いは重層性を示唆する。左門もまた「まことの夢の正なきにあらず」といゝながら却て「兄长はこゝもとにこそありつれ」と老母のいう夢の真实性を肯定している。「老母も今は疑はず」、息子がひとり彼女のもとを離れてはじめて出合った体験を、彼女が導き指示した行先をたどっていった息子が彼女の期待通りのものに直面したらしいことを信じ、「相叫て其夜は哭あかしぬ」赤穴を、実はその背後のお互いを相よびて、確かめ合つたのである。母と子は人赤穴Vというお互の影を間において喚び合つたのであり、またこの時人赤穴V



が背後の現実・渴する者の群れに通じていたこともまたいうまでもない。

千里に雲のたちゐるもなく明け、氷輪の輝きを経て陰風に眼くらみて倒れた長い一日は終った。「明くる日」、左門は母に向つて告げる。

吾幼なきより身を翰墨に托るといへども、国に忠義の聞えなく、家に孝信をつくすことあたはず、徒に天地のあひだに生るゝのみ。兄長赤穴は一生を信義の為に終る。小弟けふより出雲に下り、せめては骨を蔵めて信を全うせん。公尊体を保給ふて、しばらくの暇を給ふべし。

これは左門における青春の終りといつてよい。吾幼なきより身を翰墨によする云々とは、母の助けの陰で文を友とし観念の世界に遊んでいたことへの苦い反省であり、彼は母の元を離れると同時に赤穴の下つていった現実の地獄へと彼の体験を追つて旅立とうとするのである。昨夜の赤穴の厳しく暖かさに満ちた忠告は、彼をして「せめて骨を蔵めて信を全うせん」と彼赤穴を斃した利害、狐疑の心の世界へ向うこと、赤穴斃死の骨に触れることを誓わしめた。或いは「赤穴」という名の母の心は息子の成熟を「汝かくまでもおさなく愚かなるか」とうながし、今その旅立ちに立ち合つてゐるとも。「徒に天地のあひだに生るゝのみ」という表現と強調のしかたに、浮遊して地に足をつけることのなかつた未成熟な自己への苦い反省と受けた衝撃の深さがみえる。この苦がさをバネとして彼はじめて拒まれてゐるといふひそかなわだかまりを捨て去つて母の前に立ち「しばらくの暇を給ふべし」と言い得たのである。子の成熟は親の老衰である。「吾児かしこに去るともはやく帰りて老が心を休めよ」とは自己の通つてきた道へかしこへ息子もまた旅立っていく寂しさでもあらうが、同時にこうやつて別れる以上、それは二度と再び以前のように出会うことはない、かなわぬ願いであることを知るゆえの愛惜でもある。「永く通まりてけふを旧しき日となすことなかれ」と暗に別れを伝へてゐる。

「出雲の国にまかる路に、飢て食を思はず、寒きに衣をわすれて、まどろめば夢にも哭あかしつゝ」貧寒と飢渴の地獄へ下降するにふさわしく、たゞ赤穴から受けた衝撃を忘れぬ情熱だけをたよりに左門は行く。これは赤穴同然の自滅に歩み入る体である。案ずる通り、彼は「いかでしらせ給ふべき。謂なし」と不審の眼で迎えられるだけで、異邦人として孤立する。これは彼にとつて初めての体験のほゞである。そしてこのような眼つきに赤穴は困まれないながら遂に斃れたのである。左門はようやくその端緒に立っている。

「士たる者は富貴消息の事ともに論すべからず。只信義をもて重しとす」

これが彼の異士へ言い入れる第一声であるが、これはかつて赤穴が彼にとつての異境である左門らの前で吐いた「大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足ず」を引き継いで信を全うしようと試みたものである。行路病者赤穴の口を通してその言葉が出た時、 $\wedge$ 士 $\vee$ とは富貴功名とは全く縁のないところで、仲間同志の義だけを頼りにするよりほか生きるすべのない者たちのことであつたはずであり、その義も地獄の責め苦の中では往々にして共倒れを招くのみで為すすべもなかつたのである。今、及ばずながら左門もまた赤穴の後を追つて飢えて食を思わず寒きに衣を忘れながら、この言葉を自他に向つてつきつける。「吾学ぶ所について」現実を生きるために。

左門は赤穴から学んだところを唯一の依りどころとして単身、狐疑の心多き巷に切り込んでいったのだが、彼が学んだ所というのは、そこでは魏の公叔座の挿話に塗りこめられて示されるだけである。彼は赤穴から何を学んだのか。或いはそこに赤穴のどんな姿が、更に不特定多数のどんな $\wedge$ 赤穴 $\vee$ が投影されているのか、換言すれば左門は身をもつてどこまで赤穴の実像に迫りえたのか。左門は「吾学ぶ所について」士に尋ねまいらすべき旨あり。ねがふは明らかに答え給へかし」といつて問いかける。その挿話で、魏王は死の床にある公叔座に向つて「誰をして社稷を守らしめんや。吾がために教を遺せ」と迫る、「是君を先にし、臣を後にするなり」という公叔の言う道はま

ずこうした非情な現実の關係に縛られることをいうであらう。と同時にその關係は一方で「汝速く他の國に去て害を免るべし」と私に商鞅を逃がすことをも要請する。それは死の床という一步も退くことならぬ所に立って戦國暴力の世界と内なる倫理との平衡をとろうと危うい一本道を行くことである。倫理とはそのようなものであること、口腹の為に人を累さんやというのも他ならぬそのような生き方であることが、左門の「学ぶ所」であった。「王若此人を用る給はずば、これを殺しても境を出だすことなかれ」という殺されたくなければ殺すという野獸の境としての現実を生きる人生を「汝速く他の國に去て害を免るべし」と教える夢で救おうとする「濁するものは夢に漿水を飲む」行為、△信義Vを發見することである。

だが左門が学ぶ所は彼自身に返って来ないわけにはいかない。それは赤穴丹治を切るであらうが、また左門をも兩断するはずである。「伯氏宗右衛門塩治が旧交を思ひて尼子に仕へざるは義士なり。士は旧主の塩治を捨てて尼子に降りしは士たる義なし……汝は又不義のために汚名をのこせとて、いひもをはず抜打に斬つければ、一刀にてそこに倒る」という左門の刃は、同じように「伯氏は菊花の約を重んじ、命を捨てて百里を来しは信ある極なり。」に対し、「吾今信義を重んじて態々ここに来る」という左門自身を斬らねばならぬ。態々、赤穴の義に報いるため、己れの不義をも裁くために下ってきたのだから。

ここで左門が丹治に向けて突きつけた挿話がそのまゝ彼自身にも向いていたことに気づかねばならぬ。己が身ひとつをぬすみて國に還らんとする行路病者の「みづから手を取りつも告る」に「ねがふは捨てずして伯氏たる教を施し給へ」と迫り、また牢裏に繋がれて死を待つばかりの者に「此約にたがふものならば……何ものとかせん」と思い沈ませたのは誰だったのか。左門と赤穴の關係した世界もまた、この魏の戦國時代、また赤穴と丹治の死闘の巷と別であったとは思われない。それに「報ひすとして、日夜を逐てここにくだ」って来た左門は、今また商鞅や赤

穴が直面したと同じ「此人を用ゐ給はずば、これを殺しても境を出だすことなかれ。」という現実、利害と暴力にあとのない地点に居るはずである。そのような所に立つこと、そこで学ぶ所を問うことこそ彼が赤穴の跡を追って行くこと、報いすることであろう。そしてこのような地点では公叔座も赤穴も斃れる他はなかったから、せめて八夢Vのうちに渴をいやすことになった筈である。とすれば左門もまた斃される他はないのである。

家脊ども立ち騒ぐ間にはやく逃れ出でて跡なし。尼子経久此よしを伝へ聞きて、兄弟の篤きをあはれみ、左門が跡をも強て逐せざるとなり。

こゝに於て、左門は遂に八赤穴Vたりえなかつたことが証明されている。彼は現実の側から殆ど考えられぬ憐れみを受け、見逃されているのだ。だが、それは許容ではなく追放である。「跡なし」という通り、かの老母の「けふを旧しき日となすことなかれ」の危惧と予感通り、これより改めて彼は赤穴の如き追放と放浪の旅を生きねばならぬのである。虎狼の現実から仮にも許されているという負担を背負って。それは八赤穴Vから課せられた信義の負担を負いそれに報するために更に、というより初めて、行路病者の生を続けねばならない。

脊輕薄の人と交はり結ぶべからずとなん

これを、左門と行を共にした作者の心とするならば、苦く重い自戒がにじみ出ているのがわかる。左門の輕薄は一にその現実から離れた倫理にあるとせねばならないが、しかしそれでもその輕薄を掘り下げるより他に手はないではないかという苦しい息づかいももれてくるのである。左門はやはり赤穴のあとを追って「菊花の約を重んじ、命を捨てて百里を」行く他はないのである。

病者としての赤穴の醜惡と死靈としての彼の優しさとは左門の視た生の原質の両相であつたらうが、そこには自

らを拒んでいるものでありながら、同時に根元で求めずにおられぬ安息所であるA母Vが重なり、更にそれらを飢渴する現実の方へ下降的に思い描いていったところに秋成の出生とその後の現実的立場との確執のうちに彼が嗅ぎ当てた方向が示されている。そして、赤穴の発見に際して、自己の肉体の病に重ね合わせつゝ、更にA母Vをも重層させていったために、自己の出生をからめながら見出していったために、彼の赤穴とその背後の社会に対する思は憎しみと愛執の入りまじったものとなったが、それは彼の教養と倫理によってカモフラージュされて表出されたのである。

道心の法師西行が眼前にしながら億万里を隔てゝいた、崇徳院の落込んでいる魔界、虎狼の心なる世界に、そこから現われた赤穴に導かれて信義の博士左門は一步立ち入って、西行のなしえなかつた億万里の距離を越えていくことができた。が西行が「かの讎敵ともことごとく此前の海に尽すべし」という院の魔力から逃れていられたように、左門もまた「骨肉の人を苦しめ、此横死をなさしむる」現実から見逃されている。そして西行が「おそろしくあやしき語柄」を「深く慎みて人にもかたり出でず」その後の世界を放浪すれば、そのときは「壁を隔て人の痛楚声いともあはれに聞えければ」すぐに院の苦しみと同じ声をそこに聞きとり、今度は一步進んで「其やうを看ばや」とならないわけにはいかないであろう。とすれば左門もまた目前なるものとの孤独な對話を繰り返さねばならない。西行が生を替えて左門となり、より現実への下降を果していったように。

左門が赤穴丹治に言葉をもって先ず切りつけたその表現が次のような叫びと状況や口吻において多少重なり合っていることも、赤穴の何を左門が引継ぎ赤穴の信にどう答えようとしたかを示すであろう。

又此度の儀に付は御法度を背く杯と過言成申分、上一人より政道を乱し給へば、下方民は申に及ばず、近国他国の者迄朝暮此事を悔む、古来稀成御仕法被仰付、愚智無智の諸役人共おかくまひ被遊、御領分一統の大乱となりけるは、皆己れ等如きあほう

者共多き故也、剩へ当年に限らず是迄二十四年が間七十余ヶ条の願書一つとして御取揚無事、万民身の置所無故に如斯に一統して是迄罷出候、氏神の御言葉に鉄丸を食すといへども心穢れたる人の物を不請と有、誠に以て一國一城の主として故無事を捜し出し、年月此恨め敷事止事なし、誠に人の面にて心獸とは己等也、斯申事の其意を得難くば久留米の家中一人にても無残此所へ罷出、目前にて切腹して此世を立去れ、今一言にても言訣あらば返答有之、左も無ば大小を抜捨、馬上より下て銘々へ百拝して罷帰れ 「久留米騒動記」

これは難民的行路病者赤穴の口から吐きだされたものと想定しても大過はないであろう。とすれば、これと比べて左門の物言いが、人たることに問いつめていくよりも、士たる義を問うことに止まるのは、赤穴の背負う影、彼の無言の人心に左門が及ばなかったことを示すものである。輕薄は左門に「見る所を忍びざるは人たるものゝ心なるべけれ」という光を与えたが、同時に見る所を士たる者の義に限定する闇をも強いたのである。

容輕薄の人と交はりは結ぶべからずとなんと言ったところで、それは無理なのだ。左門は逃れ出でて跡なしといえども、「生長て物にかゝはらぬ性」の勝四郎として、三たび眼前に現われるのだから。丁度、「必ず幣をさゝげて齊ひまつるべき御神なりけらし」という忠告が「春々たる春の柳、家園に種ることなかれ」と積極的にその怖ろしさが言い換えられて訴えられたにも拘わらず、輕薄のひとの交わりを見る始末となつたのである。そして彼が「信義の篤き（シ病ク）でありシ輕薄クであるところの）をあはれ」まれて見逃されたとき、そのまま釈放ではなく彼はまた姿をかえて現われることを約束させられたのである。何度でも、現実に立ち合つてその輕薄の痛みを知るべく。

下総の国葛飾郡真間の郷に、勝四郎といふ男ありけり。祖父より旧しくここに住み、田畠あまたまづきて家豊に暮しけるが、生長て物にかかはらぬ性より、農作をうたてき物に厭ひけるまゝに、はた家貧しくなりにけり。

道心の法師から信義篤き博士へ、そして物にかゝらぬ旧家の主へと三代を経て、より現実の中に、彼は降りてきている。祖父より旧しく三代にも亘って住みつけば、祖父がそして父が二代かかって築き守ってきたものを「農作をうたてき物に厭ひけるまゝに」失う極道が現われるのも不思議はないというだけではなく、「農作」という言葉にふさわしい農業がうたてき物になり厭われるに至るといふ現実があつたことも見逃せぬ。「物にかかはらぬ性」とは単に呑気な怠惰や人の好きた限定されるものではない。彼は「親族おほくにも疎じられけるを、朽をしきことに思ひしみて、いかにもして家を興しなんものをと左右にはか」る男でもあるのである。三代の時の流れに彼の性に相俟って彼を押しやる動向がなければならぬ。

彼が伝来の田畑を失いながら、それを啜う身近な目に抗して家を興そうと（「家を興し」という表現に新時代の動きを認めることができるが）した時、「其比雀部の曾次といふ人、足利染の絹を交易するために、年々京よりくだりけるが、此郷に氏族のありけるを屢来訪らひしかば、かねてより親しかりけるまゝに、商人となりて京にまうのぼらんことを頼みしに、雀部いとやすく肯がひて、いつの比はまるべしと聞えける」といふように、丁度タイミングよく雀部が現われてくるという流れはそのまゝ時代の動向と応じている。

§ 先年より他領商人罷越候処、其内近年甚だ盛んに商売仕り、頗る民間の痛候者は、江州辺より罷越候商人共に御座候、合葉小問物と取合せ、木綿絹帛の類持参任り、手代等の者数十人に相分れ、御領内（仙台藩）在々大かた不残貸売仕候儀に相聞得申候。

宝曆四年上書 芦東山

町中近年別て商売薄相成、百姓へ田畑へ懸り骨折働候事を厭、商売を専格に致候類數多存之、却て町人よりも商功者に候

会津藩・延享二年 原田伴彦「天明朝前後の都市市況」

たとへ奢侈を止め、如何に田畠に出精するとも、農業計にては決てくらすことならず、是非商ひにてもすること也

寛政十一年 「勸農或問」

村々に古来よりの百姓の代々持伝へたる田地屋敷は世上に稀なり。当時爰かしこ村々に適々身代宣しき百姓の有は、皆以て田  
地ばかりの類にあらざる皆外に商売を兼帯するなり 享保六年 「民間省要」

一七世紀後半から商品経済の発展、都市々場の盛況に合せて進出し、元祿文化の基盤をなした新興商人は都市の  
独占支配、株仲間組織により特権化した。彼らは農村の商品作物の在郷生産者商人をも把握するため藩権力と結  
んで在郷町をもその独占支配の下に繰り入れんとする。これに対抗して在方商業は都市ギルドの末端である城下町  
々人の圧力をはねのけ、中央市場に直結しながら、直接都市ギルドに攻勢をかけ対立していく。一八世紀後半から  
一九世紀にかけての、こうした動きにつれて、在郷町内部にも庄倒的な零細農と特権的な村役人層でもある商人と  
に階層分解が進み、惣百姓一揆から世直し一揆へと一揆の形をも変えてきた。むろん、この多数の貧窮小農民は在  
郷特権的商人と対立しながら、小作化するか都市へ乞食同然に流入するかとなり、どちらにしろ斃死寸前の△赤  
穴▽や恨をのんで野たれ死している△崇徳院▽の背後に沈没していく。

かくて、農作をうたてきものに厭う「物にかゝはらぬ性」という浮遊性は、大多数の農民の陥ゆくところの趨  
勢、△物▽にふさわしい土地にかかずらつて小作農と化すか、或いは全く土地から切り離されて他によるものもな  
く浮浪人化して都市へ流れ入るかの、物にかゝわる者達の必然の運命からの浮き上がりを意味してくるだろう。当  
然、三代に亘つて築きあげた特権をテコにひとり浮上する彼の背へ周囲の者達の刺すような眼つきが集中する。そ  
して彼の目前には在郷商人と直接結びつき利をあげようとする都市ギルドが居る。「他がたのもしきをよろこび  
て、残る田をも販つくして金に代、絹素あまた買積て、京にゆく日をもよほしける。」



物にかゝらぬ性に引かれて家貧しくなる勝四郎に、生活よりも信義の觀念にかゝずらい清貧を誨う左門を、疎んじられて口をしきことに思いしみとかく囋る勝四郎に、それらは愚俗の言葉にて吾が們はとらずといひながら、学ぶ所時にあはず徒に天地の間に生るゝのみと悶える左門の面影を、それも一層現実へ下降したそれを見るのは容易である。しかし左門における信義への入病Vは、ここではもう恒常的な入性Vにまで内在化し、また背後の現実の中心部に階層として存在するという普遍性まで獲得している。そして文を友とした左門を虎狼の巷にまで下降させた導き手たる行路病者赤穴は、今雀部の曾次として現われ、左門の旅の終わりであった出奔を、こゝでは旅のはじまりとして開始すべく勝四郎を導くのである。

残る田をも販、つくして金に代、京にゆく日をもよほしたところで、「勝四郎が妻宮木なるものは」と語り出されてくる時、「人の目とむるばかりの容に、心ばへも愚ならず」と最大級の待遇をうけて現われても、もうすでに無きに等しい存在、勝四郎との無限ともいえる疎隔がある。しかし、これは入雨月Vの世界では常のことなのだ。仏土に億万里を隔て給へば再びいはじと突き離され、また結びつけようもなかった西行と院の間、山陰の果にありてここには百里を隔て、人一日に千里をゆくことあたはざる左門と赤穴の距離、そしてまたこれである。そして遠く隔つる者達がいずれもどこかこちらの眼を通した姿しかみせず、従って不透明な影を必ずまもっていたように、この宮木の表現のあまりにも型通りの、そして最大級の美辞のかげに黙って収まっている不気味さを説める。「京にゆくといふをうたてきことに思ひ、言をつくして諫むれども」とあっても、そこにどのような具体的な起伏する感情や姿態も思い浮かべることができない。「常の心のはやりたるにせんかたなく、梓弓末のたづきの心ぼそきにも、かひがひしく調らへて」という表現は宮木の内側に喰入ることを拒まれている。其夜はざりがたき別れを語りといわれながら「かくてはたのみなき女心の、野にも山にも惑ふばかり、物うきかぎりに侍り。朝に夕べにわすれ

給はで、速く帰り給へ。」と確かに直接話法で彼女の口ぶりが再現されているにも拘わらず、和歌的修辭の陰にかくれてその生々しい切実さは抑えこまれ、徹底的に控え目な、逆に底しれぬ強靱さのみがしずかに流れている。それは「命だにとは思ふものゝ、明をたのまれぬ世のことわりは、武き御心にもあはれみ給へ」と目だたぬ、それについて冷いと思えるほどのあるシンをもつて、武き御心の浮遊ぶりを突き刺し、突き離している。「命だに心にかなふものならば、何か別れの悲しからまし」（「古今八」）は比喩ではなく直ちに命にかかわる生活の事実から発せられてをり、そこだけに「世のことわり」不変性を認める苛烈な立場から、同じ時流にのりながら沈潜していくものたちを尻目に上昇していくかの如き「武き御心」の軽薄さが見つめられているのである。また表面静かにすがりながら、底に強く凝視する眼にあの左門を送りだした母の眼差しを重ねて思い浮べてもよいであろう。

「生は浮たる漚のごとく、且にゆふべに定めがたくとも、やがて帰りまいるべし」と軽々しくもいぎったのは左門であったが、「いかで浮木に乗つもしらぬ国に長居せん。葛のうら葉のかへるは此秋なるべし。心づよく待ち給へといひなぐさめ」る勝四郎も、左門同様、彼ら自身が口にした言葉のあまりの空しさ、またはそれに応ずる現実の物凄さに無頓着である。物にかゝわらぬ性とは例えばこのようなところにも現われる。そしてまた、知らずに自身の成行きをそれとなく言い当てていながら、だから一層彼らの軽薄は目に立つのである。浮木に乗って知らぬ国に漂うといふ葛のうら葉のかへるといふ、凄愴な恨み（裏見）のこもった光景に違いないのだが。このあたり、残る者の地獄はすでに始まっており、去る者にもまたそうであることが暗示されている。「夜も明けぬるに、鳥が啼く東を立ち出でて京の方へ急ぎけり」、「ほどなくいなめの明けゆく空に、朝鳥の音おもしろく鳴わたれば……山をくだりて庵に帰った」西行を思い出すならば、鳥の声は昨夜どのような予言を告げていたのか、白峯では「今より支干一周を待たば、重盛が命数既に尽なん。他死せば一族の幸福此時に亡べし」と答えていた。こゝでは

もう化鳥は勝四郎の内に内在し、彼の言葉のうちに、此秋の光景を示しているのである。勝四郎は、西行が其後十三年を経た治承三年の秋の修羅を眼近く展開してみることができず、左門が秋九月九日の修羅を追体験すべく八雲たつ地底へ下降しながら、自ら地獄の責め苦をまぬかれてしまったという前二者の体験を背負って、今三たび旅立っていることは疑いない。

此年草徳の夏、鎌倉の御所成氏朝臣、管領の上杉と御中放て、鎗兵火に跡なく滅ければ、御所は総州の御味方へ落ちさせ給ふより、関の東忽ちに乱れて、心々の世の中となりしほどに

この突然の八史実Vへの飛躍は、これまでの語り口にみられる勝四郎らの生活空間とそれを襲う時代社会の動きとの凡そ結びつけることが困難な距離感を示すものだ。これは丁度、赤穴をかかえて困った愚俗のあるじとそこに同胞をみる左門の距離に等しい。今かのあるじの位置にある勝四郎（それは口腹のために人を累わす左門とでもいうべき）らの世界に、歴史は恰も「何地の人ともさだかならぬ」「邪熱劇し」きものの如くに、そして八知識Vのように遠くからやってくる。だが、世のかような乱れは、いかなれば勝四郎らの間に根を張っていた深淵の現われたものにはすぎないともいえる。「心々の世の中」は既に彼らの崩壊に瀕した夫婦関係であり、彼らの足下であった。換言すれば、歴史は彼ら夫婦の間に楔を打込みながらやってきたといえる。

心々の世の中となりしほどに、老いたるは山に逃竄れ、弱きは軍民にもよほされ、けふは此所を焼はらふ、明は敵のよせ来るぞと、女わらべ等は東西に逃げまどひて泣きかなしむ。

心々の世の中とは一家離散である。例えば「老弱は溝壑に転ひ死し、壯者は四方に散し、父母に離れ、夫妻に別れ、老て養はるべき子を失ひ、幼ふして育てらるべき親に捨られ、又は他国に売られ奴婢となり、寡となり、飢息さの余り行先当もなく奔り出、古椀抱て食を乞」（「天明救荒録」というように。また「一八世紀以来増加した

各街道の公用人馬の用途は、宿駅に多大の負担を強要し、その困窮を増大せしめた」（原田伴彦「近世在郷町の歴史的展開」）というようにもやってきた。たゞ彼らに時代社会が直接物理的な離散を強いたのにくらべ、勝四郎ら上層民にはより内部的な人間関係としてやってきていた。「いづちへも通れんものを思ひしかど、此秋を待と聞えし夫の言を頼みつゝも、安からぬ心に日をかぞへて暮すというのも、崩壊が夫婦の人間関係としてまずはやってきているという事情があるからである。むろんそれが通れ出ることと違いがあるわけではない。「秋にもなりしかど風の便りもあらねば」、いざ自ら旅に出てみれば、「かへるは此秋なるべし」という一語がいかに重く、待つ身にはいかに危うく頼りないものかを現実には教える。かつて左門はそのことを知らなかったが。しかし、秋になれば人知れず「葛の裏葉」は秋風に白い裏を見せて何かを訴え始めている筈である。それは待つものの「世とともに悪みなき人心かなと、恨みかなしみおもひくづをれて」という幾重にも積み重ねられ屈折する怨みとして波打ち初める。この「悪みなき人心かな」という抽象的な表現と、恨み悲しみ思ひくづをるといふ、のたうつ情動の強い表現との結合の中に何がこめられているのか。

身のうさは人しも告じあふ坂の夕づけ鳥よ秋も暮れぬと

なんびともよく告げ得ない「身のうさ」とはどんな憂さなのか。約束の秋はとうに來、その秋ももう暮れようとすることをどう夕づけ鳥に叫ばせようというのか。A鳥Vが夕を告げればすぐA夜Vである。A夜Vはそこまで來ていること彼女は怨みの使徒に訴えさせようとするが、「国あまた隔ぬれば、いひおくるべき伝もない」のは常のことであつた。

世の中騒がしきにつれて、人の心も恐しくなりたり。適間とふらふ人も、宮木がかたちの愛たきを見ては、さまざまにすかしいぎなへども、三貞の賢き操を守りてつらくもてなし、後は戸を閉て見えざりけり。すこしの貯へもむなしく一人の婢女も去

て、其年も暮ぬ。

世の中騒がしきにつれて例えば「或職人の妻我が子に食を与へず、己れ勝に食しければ子は終に死せり、則母其子の肉をそぎ食しけれ共、人の肉を食ふものは存命えがたきもの故終に死せりと也」〔天明救荒録〕となるか「又家を出ずして有し者の中には飢に堪兼て自ら首を縊りて死し、或は井戸や川へ身を投て親に別れ子を捨て死せし者いくばくと云数限りもなかりし」〔農論〕となるか、そのいずれもが人の心も恐しくなりにたる姿である。「三貞の賢き操を守りて」という表現が世の中騒がしきとき、実はどのようなことでもしかありえないかを右の例は示す。秋が暮れて、人しも告げえぬ「身のうさ」はかような事態に追いこまれていくことにより、いずれをとるにしろ堪える限界を越えること間近い恐怖といつてよいであろう。彼女が八戸Ⅴを閉て見えなくなったとき、彼女がこちら側に最後に残した手懸りが「三貞の賢き操」であるが、それはかの左門が八戸Ⅴの向うに入ったとき醜怪なものをそこに見出しながら、倫なの人にはあらじと観念的判断しか下しえなかったことと同巧である。彼女は倫理的観念の八戸Ⅴの向うにその姿を隠してしまった、はじめから殆ど型通りの表情しか残さぬまゝに、勝四郎は結局、この宮木を発見すべく逆に宮木のもとを一旦去ったことになるのだ。こゝでようやく勝四郎は行動を始める、固あまた隔てた、あの八雲たつ出雲に向う左門の経験をうけて。

勝四郎が京に行き「絹ども残りなく交易せしほどに、当時都は花美を好む節なれば、よき徳とりて東に帰る用意をなすに」というところに、左門が信義の篤きをあはれまれ強て跡を追われることがなかった、いわばよき徳をとった名残りを認めることもできよう、とすればこれ以後いよ／＼左門の「逃れ出でて跡なき失踪のその先がはじまるとみることができるともまた

其後（宝暦六年奥州飢饉）格別の凶作もなければ諸人心をゆるし今（安永七年まで）にては金銀より外に宝はなき様に覚へ、

且太平の御代なれば何に不自由なく栄花栄輝に余り花美を尽し驕ることすさまじく、……銀きせるを持ては外のきせるは口中あたりか悪しくのまれぬ杯といへり……又緋縮緬の習にて髪を結び、其外さまの思ひ付纏箔をける丈長もあり、……扱女の衣裳は二年とはやる物なく、新模様仕出し物苺色紋付は田舎らしいと用ひざりに、近年蘇枋高直に成染直高ければ時行出して、紗綾縮緬縷子より木綿布子に至るまで苺色を用ひ、価さへ高ければ当世風と見ゆる様に成……西陳の織物は新物仕出しに心を尽し致方なく難義に及ぶ染物紺屋も仕様なく憫愍の紋所、或は白骨の小紋などを拵へたり、

「五穀無尺蔵」天明四年

このような記事を記憶しておいてもよいであろう。花美を好む節がどのようなときかが端的にうかがえる。

「古郷の辺りは干戈みち／＼て、涿鹿の岐となりしよしをいひはやす。」彼の旅立と共に始まった戦火はとうとう彼に追いついてきて「まのあたりなるさへ偽おほき世説なるを、ましてしら雲の八重に隔たりし国なれば、心も心ならず」と自身が今どこにいるのかに、いわば「浮木に乗つもしらぬ国に長居」していることにまず気付かせる。だが足元が「青雲の輕靡日すら小雨そぼふる」かの国、山陰の果なる八雲たつ出雲の国、そして「しら雲の八重に隔たりし国」であることに気付けば、「常のはやりたる」心も心ならずなり、また現に「岐曾の真坂を日くらしに踰けるに、落草ども道を塞へて、行李も残りなく奪はれ」という干戈涿鹿の巷が身に迫つてくるのである。むしろ、この圧力は古郷を襲っているものと同じであるが、その上「奪はれしがうへに、人のかたるを聞けば、是より東の方は所／＼に新関を居て、旅客の往来をだに宥さざるよし」というように、層一層彼にふりかゝる困難は増し、と共に古郷に加わっている嵐の強さも身に染みてわかるはずでもある。つまり、これらの障害は却て彼を強く古郷へ結びつける共通の体験であるはずなのだ。こゝに現われてきた旅の困難、関の堅固さを白峯冒頭の文人墨客風の無条件に許され「心とゞまらぬ方ぞなき」旅にくらべれば、雨月物語は相当深く下降の旅を、はるかに続けてきたことに気付くであろう。

§ 益々諸民窮困し、鄙賤の者共せんかたなく今は飢死せんよりはとて、遂に六月二日の夜赤坂と云所にして雑人原徒党をなし、同し所に住居する雑穀商ふ家々を打破り……初めの程は穀物はかり奪ひしか、後は盗人加りて金銀衣服の類迄同し様に奪ひ取ぬ……松永貞徳か戴恩記に、町々小路に新関を構へ柵をふり、鹿垣を結び、常の往来も自由ならずと戦国の古へを見しまゝに記し置しか、今そ又其如く木戸を差固め行馬を結び、往来も自由ならざるにより、工商二民業を止め戸をさし塞て居たりしは、怪しかりけるありさま也。 天明七年江戸 「後見章」

物にかゝはらぬ性の勝四郎は、かく身辺に迫った事実を「さては消息をすべきたづきもなし。家も兵火にや亡びなん。妻も世に生てあらじ。しからば古郷とても鬼のすむ所なり」と却て古郷と縁を切るように理由づけて、直ちに「こゝより京へ引きかへす」。物にかゝわらぬ性というのが前掲の、口べらしの放浪先で飢死寸前にありながら春の訪れに「最早暖氣と成背物も萌出る故如何様ともして在所へ立帰り、仮令餓死する迄も」と立出で「十に八九遂には在所へも帰り届かす」という恒なる生活への執着を基本的に欠くものの謂であり、こうした農民達との立場生き方の相違を示すものとしてよい。また彼らの「兎角在所に帰て喰ぬ迄も火にあたり親子一所に死ん。」という、共にあることへの強い希みを自身のうちに発見できぬものともいえる。勝四郎には左門のような倫理の支えもないのだから、彼の執着できぬ空虚、或いは自身にしか関われぬエゴイズムは無邪気にそしてストレートに現われる。「さては……なし。……なん。……あらじ。しからば……なり」というよどみない論理の流れがそれをあますところなく伝える。

しかし、一旦「しら雲の八重に隔たりし関」のことで心も心ならずとなった者は、すでに赤穴以来の行路へ病にかゝっており、引きかえそうとなどすれば「近江の関に入りて、にはかにこゝちあしく、熱き病を憂ふ」というふうに逐ち病は頭われ重くなるのである。その彼を看病する男が「児玉嘉兵衛とて富貴の人」で「是は雀部が妻の

産所なりければ苦にたのみけるに、此人見捨てずしていたはりつも、医を迎へて薬の事専なりし。」とあるのも、彼が左門の類であり、同時に勝四郎をつれ出した者の縁であるところには、左門を導く赤穴の面影もあるのである。いふなれば勝四郎は行路病者として左門にいたわられる赤穴の立場を引きついで体験しており、むしろ彼もまた赤穴の如く兎玉らに別れて、今度は東へ帰らねばならぬということになる。だが、この男はやゝ心地清しくなったのに、歩むことまたはか／＼しくないうちに「いつのほどか此里に友をもとめて、」いったばかりか「揉ざるに直き志を覚せられて、兎玉をはじめ誰／＼も頼もしく交」つてしまうのである。物にかゝはらぬ性は、この乱世にあつては却て「揉ざるに直き志」と賞せられる。「此後は京に出でて雀部をとふらひ、又は近江に帰りて兎玉に身を托、七とせがほどは夢のごとくに過」す勝四郎は、これほど身近に帰郷をうながす契機に囲まれ迫られながら、浮木に乗つても知らぬ国に長居する本質的な旅人である。古郷からも都からも離れて浮遊し続ける、それを殆ど夢のうちとも知らず。

「寛正二年、畿内河内の圃に畠山が同根の争ひ果さざれば、京ちかくも騒がしきに、いくら夢を見続けている男でも、もはや目覚めぬわけにはいかぬ程、古郷を荒らす戦塵がそのまゝの姿で近づいた。その先触れのように彼を襲っていた「熱き病」は今や「春の頃より瘟疫さかんに行はれて、屍は衢に疊、人の心も今や一却の尽るならんと、はかなきかぎりを悲しみける」と、世界全体の有様となつて、誰も逃れえず、誰もが認めざるを得ないようにやってくるのは「勝四郎熟思ふに」と目をあけはじめるのである。かつて行路病者赤穴としてその僅かな一角が現われてきていたところのものは、今まぎれもない世の有様としてその姿をみせる。このさかんに行われ屍を巷に重ねる猛威に西行も左門も結局はまぬかれてきており、今まで勝四郎も人夢のごとくにまぬがれてきていた。自覚なき旅人、何者かに許されて屍をさらすことをまぬかれています勝四郎も、さすがにあたりに死臭が立ちこ



めるに至り、ようやくそこに自己の成り行きを予感せざるをえなくなつたばかりでなく、そこに自己の倫理を發見しはじめる。

かく落魄でなす事もなき身の何をたのみとて遠き国に逗留り、由縁なき人の恵みをうけて、いつまで生きべき命なるぞ。古郷に捨てし人の消息をだにしらで、鶯草おひぬる野辺に長くしき年月を過しけるは、信なき己が心なりける物を。たとへ泉下の人となりて、ありつる世にはあらずとも、其あとをももとめて塚をも築べけれと、人々に志を告て、五月雨のはれ間に手をわかちて、十日あまりを経て古郷に帰り着きぬ。

彼の回心に先だち「人の心も今や一劫の尽るならんとはかなきかぎりを悲しみける。」といわれるとき、世界の終わりは人の心の終わりでもあり、さきに「人の心も恐しくなりにたり」とあつたその人心の末期的様相さえも今やはかなき無のうちに呑みつくされようとしている。その濁流の中に「秋も暮れぬと」と最後の信号を送つてきたひとの「憑みなき人心」も例外なく埋まっているのである。こゝに至つてはじめて勝四郎のもらす述懐には、その後の左門の面影が重なっている。それは殆どあの信義の病人である左門の物言いといつて差しつかえない位倫理的である。文を友とし、口腹の為に人を累さんやと昂然としていた左門は、その口腹の為に人を累わす世界に「落魄れてなす事もなき身」をさらした時、改めて学ぶ所を身体で發見し直したといつてよい。あるいは左門の看病に感謝しながらも、心中でひそかにつぶやいていた言葉だともいえる。勝四郎は自身の浮遊ぶりを「何をたのみとて：由縁なき人の……いつまで生くべき」などの言葉ではっきりと捉えだした。それによつて、こうした孤立を味わっているものとして「古郷に捨てし人」を改めて見出す。信なき己が心なりける物をといて倫理は、孤立し浮遊する自己の自覚と、それを他者の上になで押し抜けて見出すところに發生する。彼はそこで自身と同様に孤立する他者を見出すべく、ようやく断続して降りだした八雨の中を出発する。しかし、この程度の落魄で味わつた孤立がど

ここまで他者の発見に役立つというのか。物にかかわらぬ性、採めざるに直き志が柄にもなく熟々思ったりすると、どういふことになるのか。「たとへ泉下の人となりて、ありつる世にはあらずとも」という判断にやはり直き志は依然として続いているさまを見る。彼の誠実を疑うことはできぬが、それは彼の物へかゝはらぬ性の属性にすぎず、彼は今まで不誠実に事を行ったことはなく、出郷も七とせも知らぬ国に留まったのも、そしてそれを衝撃を受けつゝ反省するのもすべて、採めざるに直き志をもってやってきたのだ。そしてこの世界はもうそうした自然的な誠実では何一つ解決できぬことばかりなのである。「十日を経て富田の古城にいたりぬ」これは左門であったが、左門の見えなかつた身近な他者の貌を彼は見出せるか。

此時日ははや西に沈みて、雨雲はおちかかるとばかりに闇けれど、旧しく住みなれし里なれば迷ふべうもあらじと、夏野わけ行くに、

いつもの通り闇く△雨Vと△月Vの夜がやってくる。このすでに訪れて来ているものと「旧しく住みなれし里なれば」という意識とのズレはかの物にかゝらぬ性のなすところである。西に沈む日に宿り急ぐ足のせはしげなるもこゝにはなくて日ははや西に沈んでいるし、空は時雨にうつりゆくとも何をか怨むべきと比喩的にいわれていた△雨Vはまさに落ちかゝるばかりであり、少くとも我のみは照らしていた水輪も今はなく、そして彼は待つのではない。「夏野わけ行く」のである。事態は悪くなっており、彼の高をくくつた予想は次々に覆えされる。「いにしへの継橋も川瀬におちたれば、げに駒の足音もせぬ」、近づくものにおびえて教えるものもなく、「田畑は荒たきまゝにすさみて旧の道もわからず、ありつる人居もなし」、彼の目は昔しか見ようとしていない。「たとへ泉下の人となりて云々」の覚悟はやはり単なる比喩、万に一つのたとえでしかなかったのか。「たま／＼こゝかしこに残る家に人の住むとは見ゆるもあれど、昔には似つゝもあらね」

§ 田島は皆荒はてて渺々たる原野の如く、郷里は猶有なから行通ふ人もなく、民屋は立並へと更に人語の響もなく、窓や戸ほそを窺へは天災にかかりし人葬り弔ふ者もなく、筋肉爛れ臥もあり、或白骨と成はてて煩ひ寝し其屍に、夜の物着て転もあり。又路々の草間には餓死せし人の骸骨とも累々と重り合、幾らともなく有ける 天明四年南部 「後見草」

§ 宝曆五 大凶年 五月下旬より段々冷東北北風 雨、し、け、く、七月迄出穂無之 「天明三 穀飢喝聞書」

天明三 今年も又関の東の岡々は春より夏に至る迄暗る日は稀にして雨の日勝に覺えたり たま、く、雨、な、き、日、は、雲、重、り、空、暗、く、二百十日の頃迄に晴と曇りを教れば雨の方そ多かりける 「後見草」

§ 草履み水に声なき日ぐれ哉

橋なくて日暮んとする春の水

春雨や人住みて煙壁を洩る

さつき雨田毎の闇となりけり

誰住て檐流るる鵜川哉

雲のみね四沢の水の濁てより

蕪村

いづれか我が住みし家ぞと立ち惑ふに、ここ二十歩ばかりを去て、雷に摧れし松の聲えて立るが、雲間の星のひかりに見えたるを、げに我が軒の標こそ見えつると、先喜しきこちしてあゆむに、家は故にかはらであり、人も住むと見えて、古戸の間より燈火の影もれて輝くとするに、他人や住む。もし其人や在すかと心躁しく、門に立ちよりて咳すれば、内にも速く聞きとりて、誰と咎む。

既知のそして過去の思い出をさぐる目にはどこかに「常に紡績を事として……こゝろざしを助」けた母なるものを求め出そうとする色が見える。そうした立ち惑う日から「二十歩ばかりを去て」近いのか遠いのか、一瞬の雲間

の星の光が照らし出した、摧かれし松の聳えて立てるは、無残に残りなく破壊されながら、屹立して誇りを失わぬ姿であるが、そこに「我が軒の標」を見たのは当をえているのだ、かつての我が家を示す符牒だなどと思わなければ。あるいは「我が軒の標こそ」という安堵などと無関係に突つ立つ異様なものの姿であるとも。「家は故にかはらであり」とは不可解なのだが、彼の意識は「我が軒の標こそ」と見てから、過去の延長線上にのみ次々と対象を見出してゆきながら、その不可解さ、異様さから発するところの「燈火の影もれて輝くとするに」打たれて、「他人や住む」という不安に心躁がれもしている。彼を我が家と知りながら「門に立ちよりて咳す」る、或るためにいに引き入れている「輝くとする」ものは、世界の根源的な相貌を示すところの八雨Vと八月Vの、その一方の八月Vの姿容である。それはかつて「壁を隔て人の痛楚声いともあはれに聞え」たように、「古戸の間より」もれきて彼を刺す。「咳すれば、内にも速く聞きと」る、その打てば響く速さは「誰と咎む」ものゝ險しさ、彼の期待に答えるように見えながら実は彼を待ちかまえ打ち返そうとする力の強さを示すものに違いない。この「誰と咎む」出方が、以前円位／＼と親しく呼びかけてきたものに向い、いきなり「恐ろしともなくてこゝに來たるは誰」と西行が投げ返した、あの刺のある返事を、同じ出現の場でそのまゝ今打ち返されてきていることに気付いてもよい。

「いたうねびたれど正しく妻の声なるを聞きて」「我こそ帰りまありたり」と直截な、素直すぎる歎声をあげる勝四郎と、彼が一方で強く捉えられているねびたさまとの間には埋め難い異和がある。彼はそれに引きずられる。「かはらで独自浅茅が原に住みつることの不思議さよ」。ねびた声にひそむ秘密を半ば嗅ぎ当てている。人住むとみえぬ浅茅が原にあること、ひとり変らずにいること（他はどうしたのか）を。この間はありえぬことが目前にあることを観念的に解釈する危険と背中合わせになっているが、また一方でかわらで浅茅が原にひとり住みつる者の正

体を事実・現実の方へ下降的に問う端緒にもなっている筈である。「聞きしりたればやがて戸を明るに」と続くのは、何を向うが聞きしってのことか。彼が多少でも目前なるものに異和感をもった柔軟性に対してか。ともかくも△戸▽は向うから明けられた。

いといったう黒く垢づきて、眼はおち入りたるやうに、結たる髪も脊にかゝりて、故の人とも思はれず、夫を見て物をもいはで  
潜然となく。

こゝから「故の」という言葉を取り去ればそこにあるものがよく見える。かつて赤穴のいった「陽世の人にあらざ、きたなき盡のかりに形を見えつるもの」は「故の人とも思はれず、夫を見て物をもいはで潜然となく」ものの姿である。それに対する「いといったう黒く……背にかかりて」という前半は左門が壁の向うに見出した行路病者の赤穴に近い。「面は黄に、肌黒く瘦、古き袵のうへに悶へ臥す」病深きさまと見くらべれば、これがそれをしのぐ最悪の状態であること、つまり不浄なモノ・異物としての死体のさまが浮かびでていることがわかる。それに発する無言の泣声にうたれて勝四郎も「心くらみてしばし物をも聞えざりし」が、そこで彼は殆ど恐怖と自己防衛としての饒舌に駆り立てられる。西行の「事を正して罪を問ふ」饒舌、左門の信義に報いすという饒舌の系譜は流れ下って、こゝに「はてしなき繰り言」となって引き継がれている。すべて、こちらの、向う側から照らされた後めたさに根ざす贖罪と自己防衛のエゴイズムから発する。しかし、「いといったう黒く垢づきて、眼はおち入りたるやうに、結たる髪も脊にかゝり」たる異物の恐ろしいまでの沈黙と完全性に比べる時、彼のくだ／＼しい繰り言の何と人間のなだらしなさ・曖昧さに満ちていることか。

「今までかくおはすと思ひなば、など年月を過すべき。」という、どうしようもなく浅はかど露骨な、そして心からの悔恨の言葉に始まる勝四郎の繰り言はいたづらに時を消費し、すでに描きだされた既知の事柄以上に新しい

ことは何もない。彼は怖れ、目前の闇を沈黙を自らの軽薄な饒舌と誠意で蔽おうとするのだ。これは西行、左門と変容してきた主人公たちに初めて現われた人間的表情であり、優しさであるといつていい。自己の無力を感じるところまで追いこまれたものにはじめて訪れる人間的感情だとも。「今は灰塵とやなり給ひけん。海にや沈み給ひけん」とひたすらに思ひとどめて、又京にのぼりぬるより、人に鯛口で七とせは過しけり」という物言いには、せめてそう思いこむように努力することしか救いはなかった、そしてみじめな寄食生活を過してきたのだと、自身の「物にかゝはらぬ性」「揉めざるに直き志」を苦く受けとめると共に、その余りの不人情さに怖れてこれを合理化しようと思いつている、自己を怖れもてあましつゝいとおしむようにもして受け容れようと苦しむ男がいる。このようにな彼が怖れる自身の内なるものと彼の前にじつとうづくまるものは同じものである。いわば彼は自身の内なる異物、非人情なるもの、物にかゝはらぬ性と向かい合っているともいえるのである。この世界、この場面が内面的世界であるゆえんである。と同時にそれは己れの外部に、社会的現実のうちにも蔽として存在し見まいとしてもあるものでもある。内なる世界であり外なる現実でもあるのである。

「近曾すゝろに物のなつかしくありしかば、せめて其蹤をも見たやまゝに帰りぬれど、かくて世におはせんとは努／＼思はざりしなり。」という表現は、彼と内なる異物、と同時に外なる異民との「すゝろになつかしく」かつ「かくて世におはせんとは努／＼思はざりし」二律背反の不則不離の関係を自ら告白したものである。更に「平山の雲漢宮の幻にもあらざるや」と、その二律背反を「且ニハ朝雲ト為リ、暮ニハ行雨トナ」って望見される、自己の男女関係の中へ投げ入れて肉感的に確かなものとしようとする。自己の内外の他者を自己の女として、しかも幻想上のそれとして夢想しようとする願望とは何なのか。自身が内外の他者と関わり損つて失った時間を別な時間の中に補償しようとするのだろうか。

瘋癡さかんに行われ屍が衢につみ、人の心も今や一劫の尽るならんとはかなき限りを悲しむ時代に、なす事もなき身の何をたのみとて遠き国に逗まり、由縁なき人の恵みを受けて生べき命なるぞと、周りの死に触発されるだけで居られる男はいかに落魄れたといつても、周囲に満ちる屍との間に千里の径庭がある。深淵の彼方への彼の誠実を疑えないにも拘らず、その間隙は彼の目前にあるものの姿を制約する。

「一たび離れまいらせて後、たのむの秋より前に恐しき世の中となりて」と彼女が語るところは勝四郎の巫山の雲漢宮の幻という願望に合わせて、昇華され形を整えられたものにすぎない。さきに勝四郎旅立に続いて語られた「世の中騒がしきにつれて、人の心も恐しくなりになり。適間とふらふ人も、宮木がかたちの愛たきを見て……」という地の文を殆どそのまま科白の形に置きかえたものであり、その姿は「三貞の賢き操」を「玉と碎ても瓦の全きにはならはじものを」と言い換えた貞女の形の裏に沈んでよく見えない。しかし、それでもよく見ると「多く虎狼の心ありて……幾たびか辛苦を忍びぬる。……軒端の松にかひなき宿に、狐鶴鬮を友として」など、彼女の隠れた体験を窺わせるものがわずかにつけ加わっているのに感づく。「銀河秋を告れども君は帰り給はず」と彼女は、赤穴はその時帰ってきたのにと左門よりもっと深い不幸を背負っていることや、左門の如くに「今は京にのぼりて尋ねまいらせん」と思ったが、その左門でさえ特別に見逃されたにすぎない、「丈夫さへ宥さざる関の鎖を、いかで女の越べき道もあらじ」と、待ことだけしか残されていない惨状を訴えている。その唯一のA待つVというところの内容を、その片言隻句のうちに窺えるというところである。軒端の松のさまは既に見た通りであり、狐ふくろうを友とするものが同じ虎狼の心をもたぬわけにはいくまい。だから玉碎して瓦全をなさずと幾たびも辛苦を忍ぶというのも、同じ心をもたずには忍ぶことさえならぬのである。だから「たのむの秋（実りの時）より前に恐しき世の中となりて、里人は皆家を捨てて海に漂ひ山に隠」いって、「既に餓死に及んとする者瘦瘦の労を厭はず、日々山

野に出て草木の若芽を摘取糧とし食」(「自然未聞記」)ひ、或いは「無拠此子を捨なば我身斗は助るべきかと、海中へ投捨んと海岸迄来りしかども」(「天明救荒録」)という悲惨を味わう中で、「かく寡となりしを便りよしとや、言を巧みていざな」う者達が「然るに津軽の飢人秋より春に至て仙台へ逃行者夥しく、何も南部者なりと号す。此方の人といへは身を片付けるに勝手能又彼方にても能世話やきける物歟、内半過て年いと若き女なりと、是凶作の為に親子兄弟の恩愛を忘れて悉く彼地の蕩落商人俗に云人買の手に売渡、宿々飯盛と成ける事と聞ゆ」(「自然未聞記」)という具合につけ込んでくるのを、幾たびも忍ぶのにどれ程の自ら虎狼の心をもつ辛苦を忍ばねばならぬかは、本当は言語を絶するほどのはずである。

とすれば、彼女の余りにも抑えられた物言いの無機質さはそれだけでもう人間的領域のものでないことは明らかである。残されたわずかの有機的な動きは「今は長き恨みもはればれとなりぬる事の喜しく侍り。逢を待間に恋ひ死なんは人しらぬ恨みなるべし」の表現にこめられている。勝四郎との別離よりもはるか以前から積ってきたに違いない恨みが「すゞろに物のなつかしくありしかば、せめて其蹤をも見たきまゝに帰りぬ」という程度の言葉で晴れぐしとなるはずがないことに気付けば、これはもつと別の意味をはらんでいなくてはならぬ。「逢を待間に恋死なんは」にしても、待ちえて死んだところで恨みが晴れるわけでもなく、かといって他に待つものもなく死ぬよりは、せめてと待ち続けるような待ち方をして死ぬという極限の姿を「人しらぬ」(「人しれぬ」ではない)のだという趣がある。人知らぬのは、自身を内から突き崩していく暴力や虚無に堪えるためにのみ待つことを必要としたという、彼女を内外から追いつめた非人間的情況であるといいたいに違いない。とすれば、そう訴えて「又よゝと泣を、夜こそ短きにといひなぐさめて」臥すというのではないのである。夜が短かければ短いほど、その沈黙に等しいかすかな言葉の背後からにじみ出る苦悶に耳を傾け尽す以外にはない。彼はこゝでも「物にかゝはらぬ性」を



どうしようもなく發揮している。その性ゆえに彼は時代社会の動向に反応しながらも身を損わぬ距離を保って、よく歴史の動きを体現する浮標たりえたのだが、それはまた彼に見るべきものを見ずに終る悲惨に陥入れる二律背反をも強いたのである。

窓の紙松風を噓りて夜もすがら涼しきに、途の長手に勞れ熟く寝たり。五更の天明ゆく比、現なき心にすゞる寒かりければ、衾帳んとさぐる手に、何物にや籟くと音するに目さめぬ。

「又よゝ泣を」という表現に続いて「窓の紙松風を噓りて夜もすがら」とあれば、もはや泣声がそれとしては現われぬ別空間に移ったことは明らかだ。西行の旅立以来の勞れを背負つて彼は熟睡した。夜明けの光で見れば衾かづかんとするにすぎぬ手の動きに、彼を襲う目覚めにひとりいる寒さと、より母なる冥さの中に居続けたいとむずかる子の姿を見ることがができる。むろん彼の求めた懐ろはいうまでもなく、衾もなく、まつにかひなく雷に摧かれし松の落葉に抱かれて彼は寝ていたにすぎない。がこゝにも昨夜の言葉の余韻くらは影をひいている。「籟くと音」「面にひや／＼と物のこぼるゝ」はひそやかな声や涙の名残りであり八月雨である。「雨や漏ぬるか」と見れば……有明月のしらみて残りたるも見」えるので、昨夜はやはり八月雨は出ていたのであり、輝／＼しき灯火のようになを刺していたのである。そして「家は扉もあるやなし」とあれほど判然と向うとこちらを隔てながらも、迎え入れてくれた境はなくなっている。

屋根は風にまぐられてあれば有明月のしらみて残りたるも見ゆ。家は扉もあるやなし。簀垣朽爛たる間より、萩薄高く生出でて、朝露うちこぼるゝに、袖湿てしぼるばかりなり。壁には蔦葛延かゝり、庭は葎に埋れて、秋ならねども野らなる宿なりけり。

§ 秋迄に不至死失るもの彫舗、其数不知、後々は四壁へもぐら生憂り内迄、竹萱芽杯生茂り荒果たりし為体目もあてられぬ事共

なり。 「天明救荒録」

其村里に人とは一人りもなし、すはいかなることやと見まわせは田畑の後は茫々たる叢となり、家々は皆倒れ傾き軒端には蕨などはひまとはれり、怪しと思ひながら空しき家に入て見れば、篠竹など縁に貫き出たり、其間に人の骨白々と乱れ有しを見て目も当られず 「農論」

風の夜もしつかなる夜もおきかへてやとり果たる浅茅生の露 「耳目心通記 中」

たしかに、こゝには「葛のうら葉のかへるは此秋なるべし」と契つた葛が繁茂しており、夜前「人しらぬ恨み（裏見）」を白々と見せていたのである。そしてこの光景は昨夜の言葉の、足下の現実を示すものなので、彼が肉眼で見た最も確かで、最も近くまで迫つた現実の像なのであるが、「さてしも臥たる妻はいづち行きけん見えず」なのである。しかも「奥わたりより、端の方、稻倉まで好みたるまゝの形」であるにも拘わらず。「或白骨と成はてゝ煩ひ寐し其俛に、夜の物着て転もあり。又路々の草間には餓死せし人の骸骨とも累々と重り合、幾らともなく有けるを見過侍る」（「後見草」）ということもあるもので、もう一わたり見回せば「呆自て足の踏所さへ失れたるやうなりしが」という表現は心理的な比喩にとゞまることはなかつたかもしれない。

§ 卯年不順の氣候により時疫一般に流行して病に臥もの家内に二人三人有といへども、親族も見廻せず、外の人には猶出入せず、近所のものも見届す、死しても僧を請じて引導も不受、葬礼の式を行ふものもなし、親類縁者朋友近野辺の送りをせせず、子、兄弟の間にて薦や筵に包み背負出して堀埋め、其にも力及ばざるものは前庭を掘、壘の低引掘出し埋たり、又は埋るものなく其家にて朽腐、蛆、蒼蠅杯多く、其臭気甚しく終に白骨而已豈々と残るもあり、埋といへども穴浅ければ犬掘発し食散し、五体壊られ散乱し、鳶鳥餌食となるもあり 「天明救荒録」

そこで勝四郎は肉眼で見るかわりに「熟おもふ」のである。解釈が始まる「妻は既に死て、今は狐狸の住みかはりて、かく野らなる宿となりたれば、怪しき鬼の化してありし形を見せつるにてぞあるべき、若又我を慕ふ魂のか

へり来りてかたりぬるものか。」彼には眼前の荒涼たる景も、昨夜の恨みを含んだ言葉や幻象も、すでになく、あ  
るのそれはそれらに対する解釈であり、その無惨さは狐狸の類の「怪しき鬼」にまで貶められ、また己れが慕うのでな  
く「我を慕ふ魂」という思い上った断定に余すところなく表われている。「かくて世におはせんとは努力く思はざ  
りしなり」という息をのむ思いは「思ひし事の露たがはざりしよ」という安心にまで下落した。「我が身ひとつは  
故の身にしてとあゆみ廻る」姿は感傷にすぎない。そして彼の「其あとをもとめて壠をも築べけれ」という予想  
通り、「むかし閨房にてありし所の簀子をはらひ、土を積みて壠とし、雨露をふせぐまうけ」を見出す、それと  
てもすでに築れてあり、彼の手を出す余地はない。彼の為すことは「夜の霊はこゝもとよりやと恐しくも且なつか  
し」がることだけで、その間にも「怪しき鬼」から「霊」へと一層日常化は進んでいくのである。そして「恐しく  
も且なつかし」い、残された僅かの情熱が辛うじてそこに見出したものが「いたう古びて、文字もむら消して所  
く見定めがたき、正しく妻の筆の跡」である。彼のしたことは、その見定めがたき文字を正しく妻の筆を判断す  
ることだけだったのか。「法名といふものも年月もしるさで」というのは、死者Vという観念の中に納まってしま  
うことへの、残された抵抗ではないか。

さりともと思ふ心にはかられて世にもけふまでいける命か

「末期の心を哀にも展たり」という心を勝四郎は読むことをせず、この最後のそして最も直接的に彼女の心にあ  
れる機会を棒にふるってしまふ悲惨を演じる。「こゝにはじめて妻の死たるを覚りて、大に叫びて倒れ伏す。」彼は  
この歌に妻の死という観念的事実を読んだだけで、歌の心を読んだのではなかった。そして直ちに「去とて何の年  
何の月日に終りしさへしらぬ浅ましさを。人はしりもやせん」と立ち出でてしまうのである。彼の惨状の証しとし  
て「立ち出づれば、日高くさし昇りぬ」と、夜Vは全く終息する。

かくて、夜Ⅴの中へ閉じこめられたまゝ、昼の日常光に押し隠されてしまった心とは何なのか。この歌は完全な自問自答の中に閉じこもっており、外に向つて開かれた所はない。そして内側に向つてもまた許すことなく拒絶の斧が振りあげられている。さりととも思ふ心に対する冷い拒絶は実はその心の方が一の期待にさえ応えられなかつた者への深い怨恨と表裏をなす。希みを一切たち切られた心の受けた傷手は、そうした人間的な心への自虐となつて他に向うところなく自身にはね返る他はなかつたのである。勝四郎はこの死臭漂う冷い拒絶にあくまでつき合ひ通さねばならなかつたはずである。この歌の自閉性こそ、冒頭から宮木像につきまといつていたヴェール、型にはまつた冷たさの正体である。それは悲鳴を無視され続けてきた者の必然的に強いられる虚無の姿である。あの「いたう黒く垢づきて……夫を見て物をもいはで潜然とな」いた者のさまである。

日高く昇つたとはいへ、一旦死界の片鱗でも触れた人Ⅴをもつ者は普通である訳はなく、「かへりて何国の人ぞと咎」められる。そして彼の方も近き家の主を「昔見し人にあらず」とすれ違ふ。旧しく住みなれし里は昨夜の体験を経て異郷の相貌を現わしたのであり、それと共に彼も異邦人であることを覚らぬわけにはいかない。彼は異邦人として礼をつくし「礼まひていふ」のである。「此隣なる家の主なりしが、過活のため京に七とせまでありて、昨夜の夜帰りまありしに」と全くこれは異境をはじめ訪れた者の物言いである。そこでは昨夜から今朝にかけての体験も「妻なるものも死しと見えて壠の設も見えつるが、いつの年ともなきにまさりて悲しく侍り」というような表現しか与えられないのであり、また見も知らぬ者に妻なるものについて「しらせ給はゞ教給へかし」と頼み込まねばならぬ孤立を味わう。むろんこの願ひは「哀にも聞え給ふものかな」と一応は聞かれながらも「我こゝに住むもいまだ一年ばかりのことなれば、それよりはるかの昔に亡給ふと見えて」とやんわり、だがはっきりと拒まれる。「すべて此里の旧き人は兵乱の初に逃失て、今住居する人は大かた他より移り來たる人なり」と異郷なること

を念を押される。

§ 在家の貧者潰れ離散の跡は御上への土物掛り有連、役人の為に家を被取、上屋敷の樹木、産宮の神木、先祖の塚木迄伐取られ、先祖より代々相伝の田畑は富人借方の為に取られ、翌辰の年（天明四年）帰参して立んとすれ共かくの如く取散され立事なり難く路頭に迷ふもありけり 「天明救荒録」

勝四郎の孤立と死の日常化は同一平面上にある。「所に旧しき人と見え給ふ……此翁こそ月日を知らせ給ふべし」との手懸りは「菩提を吊」ふことによつて、彼女の末期の心を伝えるかもしれぬが、同時に年月を知らせ入死者Vとして静止的に確定してしまふかもしれぬ。この二面性をもつた翁が夢の終りに現われて夢の名残りを伝え、またそれを終結させるというのは、左門における老母の介在と同巧であるが、そのイデオロギッシュな働きは一層強まっている。「こゝより百歩ばかり浜の方に、麻おほく種たる畑の主にて、其所にちいさき庵して住ませ給ふ」翁は、この現実を宮木とは反対の天上の方へ超越している気配を漂わせており、彼だけが勝四郎を「帰り給ふ」と見てくれるが、そのことによつてこの世界の異郷性を消去してしまふことになる。彼の話は回顧談であり、すでにそれは三度目の繰り返しとなる。そして「只烈婦のみ主が秋を約ひ給ふを守りて、家を出で給はず」と三貞の賢き操、玉と砕けても瓦の全きにはならはじという倫理的観念性を一層強めて伝えてくる。「翁も又足蹙て百歩を難しとすれば、深く閉こもりて出でず」といつている通り、百歩の間は大いに遠く、その倫理的な意味づけに相応する距離なのである。彼のいう「一旦樹神などいふおそろしき鬼の栖所となりたりしを、稚き女子の矢武におはするぞ」という表現にしても「軒端の松にかひなき宿に、狐鶴留を友として今日までは過しぬ」には遠く及ばず、勝四郎の「今は狐狸の住みかはりて……怪しき鬼の化してありし形を見せつるにてぞあるべき」にさえ及ばぬ程度にしか、彼女の相貌を捉えてはいない。

「其年の八月十日といふに死給ふ」と何の重みもなく年月が明かされた上、「翁もとより筆とる事をしもしらねば、其月日を紀す事もえせず、寺院遠ければ贈号を求むるすべもなく」と日常的な絵解きまでいいいにされる始末である。そして「今の物がたりを聞くに、必ず烈婦の魂の来り給ひて、旧しき恨みを聞え給ふなるべし、復びかしこに行きて念比にとふらひ給へとて、杖を曳て前に立ち、相ともに櫛の前に俯して声を放て歎きつゝも、其夜はそこに念仏して明かしける」というように、宮木を八烈婦Vに祀る一方、勝四郎をその前に跪かせるべく率先して導く。その語るところには、勝四郎を含む外部に対して己れを深く閉した絶望と怨恨の内にもったやり場のなさはぬぐい去られ、宮木は彼をまともに相手にして恨みをのべてくれるかのように、その沈黙に徹した怒りが薄められている。決して彼女はその閉鎖性、拒絶を解くことはないだろうし、勝四郎らが許されることもまたないだろうに。

だが、まだ八夜Vが全く明けてしまうまでもう一刻の間があり、「寝られぬまゝに翁かたりていふ」と、もう一度遠くから八烈婦Vの背後へ接近が試みられる。こゝより百歩どころでなく「翁が祖父の其祖父すらも生れぬはるかの往古の事」「真間の手児女」の伝説にまで遠ざかったところに探られる。

此郷に真間の手児女といふいと美しき娘子ありけり。家貧しければ身には麻衣に背袴つけて、髪だも梳らず、履だも穿ずてあれど、面は望の夜の月のごと、笑ば花の艶ふが如、綾錦に裏める京女も勝りたれとて、この里人はもとより、京の防人等、国の隣の人までも、言をよせて恋ひ慕はざるはなかりしを、

これは四度繰り返される宮木の受難への接近である。さきに「一旦樹神などいふおそろしき鬼の栖所となりたりしを、稚き女子の矢武におはする」と表現されて終ったところを花鳥風月の自然の中へと美化を加えながら下降させたものであることは「宮木がかたちの愛たきを見ては、さまざまにすかしいぎなへども」という箇所を持ちだす

までもなからう。その美化の仕方は、必ず烈婦の魂の来り給ひて、旧しき恨みを聞え給ふなるべし」という倫理化、エゴイステイクな理解の延長線にあり、その「恨み」を「手児女物うき事に思ひ沈みつゝ、おほくの人の心に報ひすとて、此浦回の波に身を投し」というように、倫理的な婉曲を強めることであつた。それに応じて「玉と砕けても瓦の全きにはならはじものを」と辛苦を忍ぶことが却て「此浦回に身を投し」というように耐え忍ぶことよりも、それから逃れて玉砕するか如くに衰弱して表現されてきている。だから「此亡人の心は昔の手児女がをさなき心に幾らをかまさりて悲しかりけん」と述懐されるのは当然のことである。この綺麗事のおさなさに比べれば、宮木の心は成熟した大人の孤独である。「翁が稚かりしときに、母のおもしろく語り給ふをさへいと哀なることに聞きしを」といったのは、彼が子供心にも彼の母の姿に手児女の「望の夜の月のごと、笑ば花の艶ふが如」き無表情を重ね合わせて、その「おほくの心に報ひす」という心の真相険しい拒絶を読みとつたからに違いない。物語りて「かたる／＼涙さしくみととよめかぬる」老の物えこらへぬ様子は、此亡人の心に昔の手児女がをさなき心の表現が到底及ばない悲しみ、悔恨に発するであらう。亡き人の真実に迫りえなかつた「勝四郎が悲しみはいふべくもなし」、

此物がたりを聞きて、おもふあまりを田舎人の口鈍くもよみける

いにしへの真間の手児奈をかくばかり恋ひてしあらん真間のでこなを

思ふ心のはしばかりをもえいはぬぞ、よくいふ人の心にもあはれなりとやいはん

勝四郎の悲しみに同化した田舎人の、苦い誠意から詠まれた歌は、これまでの口とき表現をもつてして遂に捉えることができなかつたことへの苦い後悔を踏まえて、勢一杯の誠意をこめて己れを許さず拒んで止まぬ他者への片思いを披瀝し、呼びかけたものである。「思ふ心のはしばかりを……」は殆ど秋成の、そうした拒まれる己れへの

自己憐憫といつてよいであろう。勝四郎はこの悲しみを負つて、今度は他者への一体化を夢想しはじめるのである。

△見る者Vと△現われるものVとの動的で不可分の関係は、西行と崇徳院、左門に赤穴そして勝四郎における宮木へと移りながら、次第に△現実Vに向つて下降している。それは、見る者の足元が社会的現実の基部へ下りるに従つて、現われるものは彼の内部世界の相貌をにないながら、彼の内部であり同時に外部でもある異物としての存在という二重の顔を露わにしてくるといふように続けられる。廻国の「道心の法師」から「清貧を憩」ふ博士へ、更に「田島あまた主づきて家豊に暮しける」農民へと、△見る者Vが自身の生活的基盤を明していく度合に応じて、彼らの彼岸を見る眼も「事を正して罪をとふ」勸懲的人道に立つ独善から「見る所を忍びざる」信義に抱る軽薄へ、そして「揉ざるに直き志」の「物にかゝはらぬ性」へとこわばりを捨て現実につく柔軟な視線を獲得していく。それにつれて△現われるものVの方も当然、彼らからは「魔道の浅ましきありさま」から「一生を信義の為に終る」あやしきさまへ、そして「我を慕ふ魂のかへり来りてかたりぬる」ゆめ／＼思はざりし有様へと親近性を増して見えていく。と同時に向う側は饒舌から無言へと言葉を失いながら、怨恨は沈潜し背後に強い拒否の核を漂わせてくる。そしてこちらは逆に向うに対する罪の意識、後めたさを強めざるをえない。

崇徳院の身辺を刺を含んだ眼で見、饒舌で攻撃する一方の西行から、優しい沈黙のうちに拒絶をこめた視線に身辺をさらさねばならぬ勝四郎へと、△見る者Vの位置も逆転してくる。主従の関係から義兄弟の間柄へ、いわば自他の公的関係に始まり、夫婦の、つまり男女の間柄へと枠組を移し、更に「夢窓の鯉魚」における自己の自己に対する関係へと変わる。その場も里近いにも拘らず松柏奥ふかく茂る深山の上から、人々の通行を眼前に見送る加古



の駅、そして騒がしき世の中の只中である真岡の郷という地上に降り、更にはそれらの場所近くにいつもそれとなく並んでいた海・湖の水中へと、象徴的に移行する。こうした、いわば悪夢の流れが、そこに降りそゞぐ雨の暗さと八月の明るさに照らされて展開してくるのである。以後、両者の関係はもつと緊迫して△捨つる者▽と△魔うもの▽というように悲劇的な様相を強めていくのである。

秋成は自己の自己に対する違和、自己と家族就中妻に対するそれ、そして自己の社会に対する違和に至る、それ／＼位相を異にする自己以外の存在との関係を次第に重層させて総合的に自己とそれらとの関係を捉えようと試みているようにみえる。その時、彼が自身の位置をそれらに対して確保する刻印にしたものは、自身に対しては己れの肉体的欠陥を、家族や妻に対しては捨てられ拒まれた子の狷介なる意識という出生のあり方を、そして社会に対しては茶屋の果でありながら文筆による知識階級の虚偽の意識を、それ／＼対置させることによって「穢多でさへなけりや御めんの人交わり、何にせよかし、たゞ今は山の大将我一人。お相手がござらしやるまい」（「胆大小心録一一〇」）という独行の自由と哀れに悲惨な孤立とを表裏合わせて表現することに成功しつつある。飢渴する者たちにはひそむ鋭く刺すような眼つきを読みとれるのは、本来ならば穢多にすぎぬ身が現在御めんの人交わりをしていゝる異和を通してであろうし、また彼らに暖く優しい表情が失われないのは、そこに母の面影が重なるからである。そして彼らの異和が△病▽を通して内的に描写されて来、また例えば「翁も又足蹇て百歩を難しとすれば、深く閉こもりて出でず」という表現などには、自身の肉体の不具が自己の閉鎖的な罪、見るべきものを見えぬ欠陥に重ねられていることを明瞭に示していると共に、向うに投影されれば彼らとの距離を示すことにもなるのである。表現の上では、それらの契機は彼の使う雅語に塗りこめられ、彼はそれにより殆ど現実には表現を許されていない世界、現実の核心をそれと知らせず捉えることに成功するが、一方ではやはりそこにあるものがあると見出せず

倫理的な観念の中にくらましてしまうことを強いられたのである。

一 こうした秋成の位置は、上は幕藩体制的領主制に制約されて、支配階級の形式の中に反体制的な自由な感性を盛りこむことに成功しながら、下からは新たに発生してきた小作農や都市賃労働者からの突き上げを体験することによって自身の罪や危機意識をも表現した地主・金貸資本層ら、近世後期社会の動向を最も端的に示す階級の上にあつたといつてよいであろう。たゞ彼の出生や肉体的条件など個的条件は彼を宣長や心学とは異なる位相に引き寄せ、一層強くその危機意識を表現に盛りこませたと見られる。